

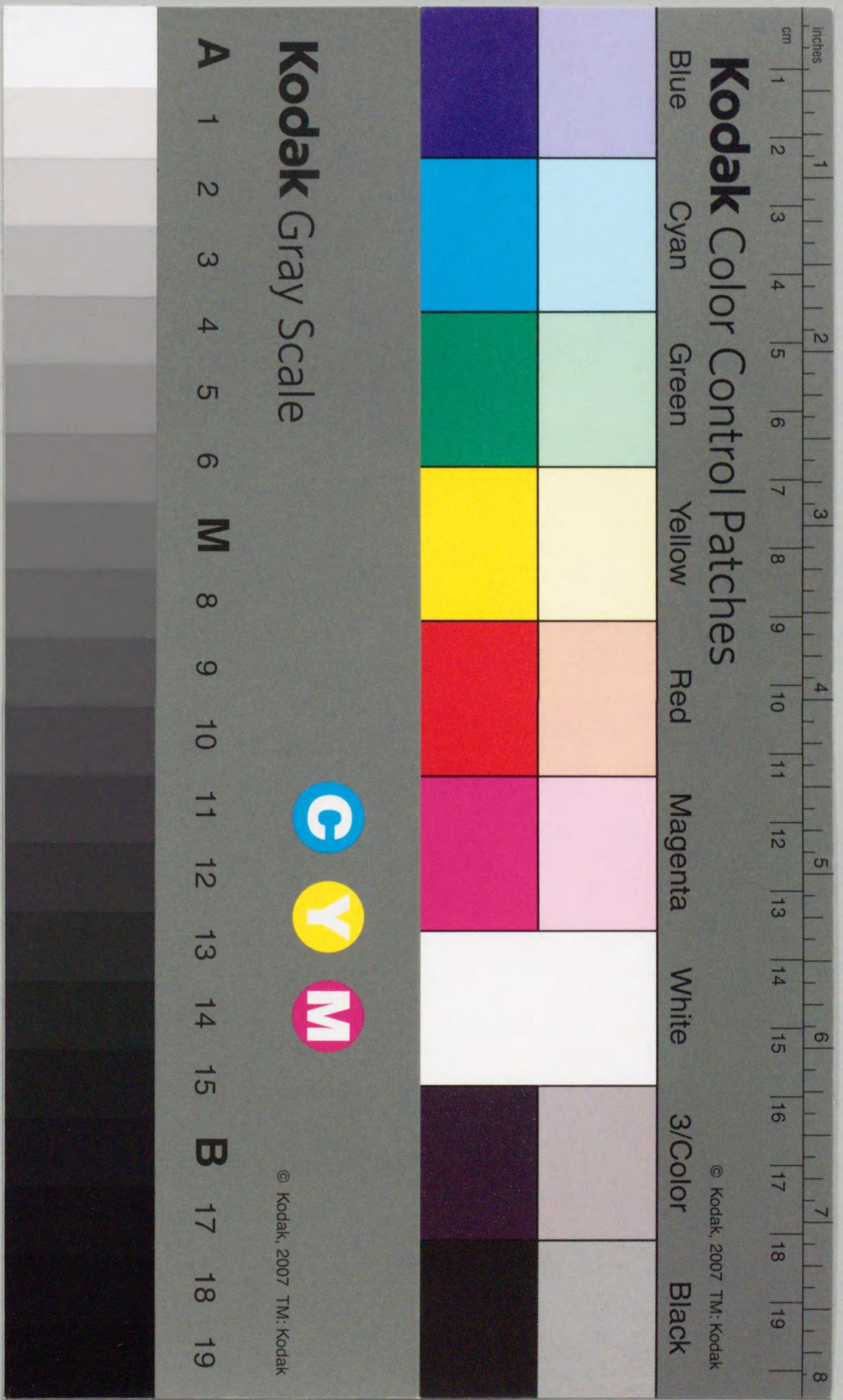
915.6
H244t



X
複写

東亜あちらこちら

長谷川春子著

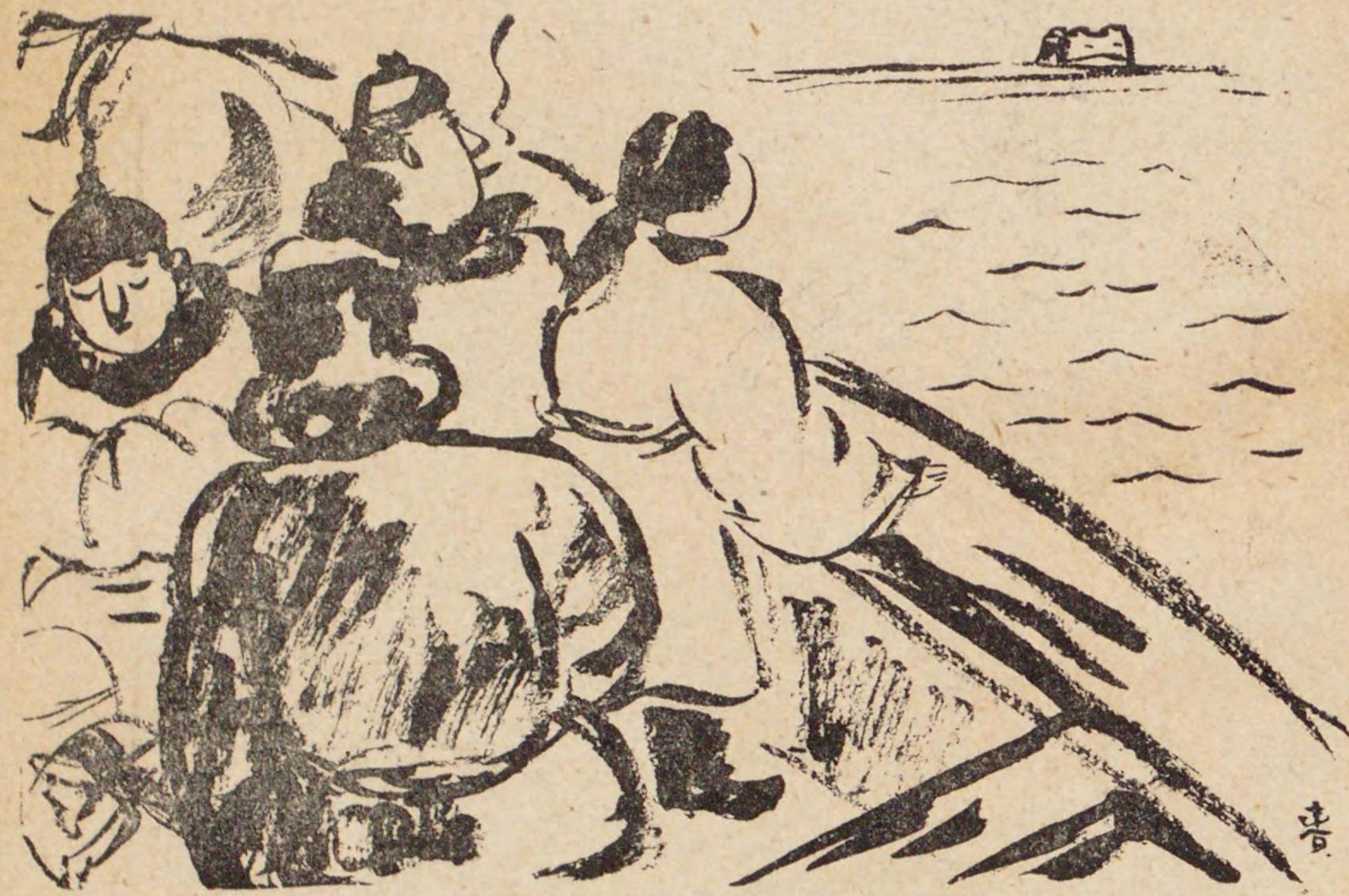




集 筆 隨

ら ち こ ら ち お 亞 東

著 子 春 川 谷 長



版 房 書 戶 室



海南島浮粟泉

9156
H244t



31799



著者近影

福田勝治氏うつす



廣東むすめ

東亞あちらこちら 目次

| | |
|--------------|----|
| 日本の風趣 | 一 |
| 秋風の花束(高原の牧場) | 三 |
| 潮の香(南伊豆) | 一二 |
| 蓼科高原 | 二〇 |
| 春宵道後の出場 | 二九 |
| 古建築 | 三五 |
| 秋草の風景 | 三九 |
| 佛印雜記 | 四五 |
| 河内と海防のある時の情景 | 四七 |

| | |
|---------|-----|
| 佛印藝術雜記 | 六九 |
| 安南風物 | 七七 |
| 印度洋 | 八九 |
| 三月の印度洋 | 九一 |
| 南支那・海南島 | 九九 |
| 南粵四趣 | 一〇一 |
| 澳門行 | 一〇八 |
| 廣東デルタ地帯 | 一一五 |
| 再會 | 一二三 |

中 支 那 一三九

中支那の味の名物 一三三

武漢の景(慰問行) 一四〇

シベリア・北滿 一六九

モスクワの雪 一七一

シベリア寒道中 一八一

北滿のゴムの木 一九八

蒙 疆 二〇五

包頭のある宵 二〇七

生きた敵兵に出くはした時 二二七

雪の中の日の丸 二二七

旅 雑 記 二四三

飛ぶ空の三趣 二四五

旅のたべもの 二五八

内地小情 二六一

寸陰風流 二六三

春 庭 二六八

女性風俗雑感 二七〇

日本の風趣

| | |
|--------|-----|
| いまが替へ時 | 二八〇 |
| 梅雨雑記 | 二八三 |
| 移りかはり | 二八八 |
| 颱風防戦 | 二九三 |
| 寫真を撮る | 三〇二 |

装幀 菅野圭介



秋風の花束

高原の牧場

山のでつ邊の一握みぐるゐの廣さの盆地の真中にある本館の入口で炊事番の若い男が鐘をがらんがらん振りまはすと、四圍の一めん真白な霧の中から忽然と十四五人のたくましい男が立ち現はれてきた。

一しよに白や黒のまじり毛のコリイ狗がこれも十五六匹か廿匹ぐらゐでてくる。人間の肢の間を要領よく縫つてござこそ土足の食堂のテーブルや板の腰掛の下にもぐり込んで上の人間共から落ちてくるお餘りを、蚤をかき乍ら尻尾を振つて待つてゐる。

牛飼ひ達は夕方のお茶、うけのさや豆の鹽ゆでを盛んにもぐもぐやつて忽ち食べ殻のさやの山を卓の上へこさへ上げる。

外は一面の白い霧のあやめもわからぬ白晝の夢だ。時々濃くなつてさあつと雨になる。

又ちよつと晴れかけては向ふの牛小屋の棟が出て來たり事務所が見えたり四圍の風物がすこし見當がつくかと思ふと、ひよつくり遠くの山岳の頭がぼかりと雲の間から浮き出して又すぐ隠れたりする。

晴れがする分續きすぎてクリームやバタをこしらへるのに入用な冷めたい山の清水は細つてしまつた。日曜や休日には東京や輕井澤からハイカーに押しよせられて、賣りに出す約束すみの牛乳やバタやクリームまでにする分まで一日に何斗とこの健脚者達に平げられてしまつて山も賑やかすぎる程だつたのが、ゆうべ夕立が、裏妙義のここぼこの岩の頂きの邊から、鳴りひびいて攻めのぼつてきて、疲れきつた夏の末の山

々に盆をくつがへすやうに水をぶつ掛けて通り過ぎたら、もう今日の牧場はさびしいしらじらした秋の山間になつてゐる。

此處は即ち上州の名物妙義山と、ハイカーにはおなじみのあの岩の壁のついたてのやうな荒船山との間の山の峽をだんだん上つて漸く人と馬しか通れない蔦の細道のどんづまりで、もう信州との國境になる物見山のてつぺんの小さな凹みに、思ひもかけないまるで瑞西の美しい山の牧場をそつくり小ぶりにかわいい見本にしたやうな風景と、濃い青色のうまさうな牧草をもつ牛にも人にも嬉しい一小天地があつたのです。

山の牛共はつよい。

雨が降らうが、今日の霧にとちこめられようが、たとへ又どんな大雷雨にぶたれようが平氣で山のてつぺんでござ草を食ひ、夜も岩かげで眠つてゐる。

白い霧がぼつかり晴れると向ふの小山の美しい濃い青い牧草を食べてゐる牛共が右手の椽からも左手の窓にも所在に現はれてくる。そして又雲中に消える。

然し我々の近くでこのおいしい柔い牧草を食べてゐられるのは現在乳を一日二回三回としぼられてゐる産後の淑女たちで、あとの連中はみな例の岩かげに假寝して山頂の荒草を食つてゐるのだ。

但しこの牛共はあの畫によく描かれる美しい斑點のある小山のやうに肥つて立派なホルシュタイン牛ではない。

すこし小型でジャアジイ牛と云ふのださうな。ラクダ色でやせてゐる。畫描きの私にはあの重量のある奇麗な斑牛と青い牧草との調和を空想して此の山奥へ訪問してきたので案外に貧弱な姿に牛共が見えて残念だが、そのかはりこの牛共は食慾の盛んな私に、貧弱な體と正反對に濃厚な、ホルシュタインのよりもつとつと甘い乳を飲ませてくれた。更にそれを集めて凝らしてこしらへた新しいクリームの味の素敵さはまるで若人のくちびるのやうだつた。

牧場の會社の上役は東京から見まはりに遣つてきて、此の牧場の宣傳がききすぎて

休日にはハイカアが何百人も押しよせて来て、牛乳生産供給の豫定を狂はした報告をきいて唸つてゐる。

『ううむ、如何して一體そんなに人が知つとるのかな。會社では別に宣傳もせんのだが』

『はあ鐵道省のハイキングコースに此所がちやんと入つとりますのださうで』

然しわるいことでもないのだから牧場の所長や係員たちと一しよに隣りの座敷でよみんな上機嫌だ。いろんな改良改築の豫算を所長はしきりに計上する。上役は自分が小僧時代に牛の乳の出を上らしてしまつて叱られた話なんぞをしてゐる。私は寝ながら、はてのつそりとした牛にもそんなせん細な所があるのかと牛を見直し乍らきいてゐる。

然し襖ひとへの私の方では夜になると隣人とは反對に不機嫌になるのだ。一泊早々にして逃げ出さうと決心した位だが、さて朝になつてみると此處の他のあらゆるよさと愉しさが又滞在を誘惑して出立の決心をのばさせる。そして又夜が來ると憂鬱の再

來だ。

本尊が牛でそれに牛飼ひ犬、雑用の馬と二百匹ぐらゐるも獸類がかたまつて住んでゐる凹地なのだから、たとへ爽涼の山上でも蠅や蚤と仲よしになれるやうな人間でなければ居られないわけだが、静かな冷めたい寢ごこちのいゝ筈の山の夜が來ると、それでも蠅の方は退却してくれて寢ぼけ蠅が漸く僅かに五六匹もめそめそと私の寢顔の上をうろつく位になるのだが、蚤の方は益々活躍だ。如何に蚤取粉でむせさうに、黄粉餅のように、全身をまぶして布圍の上へ轉がつてゐるようとも、此の山の蚤は豪傑なのか平氣で私の體にとり付いてくる。

石油のつきかけたランプをかき立てて、飛び起きたり溜息をついたり、あたりの壁、襖、布圍、敷物一切がみな茶色で胡麻をまいたようにしみとも蟲ともわからぬのを見つめて悲しんでゐる中に、夜はしらじらと山の峽から明け初めるといふのか毎夜の夜程でそのわびしさはここに極まるといつた具合だ。

うとうと悶へながら、半ば現にみる夢の斷片に芭蕉の陸奥記行の中に蚤しらみ馬の

尿で悲しく夜を明す所なんぞがでてきて、朝になつて思へばこのロマンティックな夢も又笑止だが。

その次ぎの日は明け方から一めん空はすっかり晴れてきた。妙義の裏山は表側のやうに奇峭でなく角峰とか齒峰とか云ふ様におだやかに面白く並んで此所の一天地の空はてをくぎつてゐる。近い三方は國境の物見山の一部のでこぼこで、あちこちにさくを仕切つた特別に眞青な色彩の牧場の草、そのへりの森林の黒綠色にちかい濃さ初秋の碧空と美しく三つが對照してその清麗なこと、すっかり明るい清い天上の詩だ。

牛共は溪を渡り乍ら水を飲んだり道ばたの草をくはへたりして犬に追はれ乍ら山道をのぼつて行く。牛飼ひがあとからついて行く。

隣室の一行は雑用馬に鞍をおいて殿様のやうな氣持ちで朝風に山々の巡視に出かけて行く。子供達は三里下の學校へ下つてゆく。

私はこの晴れた日の愉しい一小天地の詩を頭腦と心に充分にひたしてしみこませて

置かうと牧草の柔いのをふんで楽しむ、森には鳥が氣持よきさうに鳴く、今の心もちそつくりなノアイユ夫人の詩が自然に口邊にのぼつてくる。

そのうち何時の間にか私は一つの花束を編みあげてゐた。名も知らぬ牧草や高原の花ばかりではあるけれど、色彩のとり合せをくらべくらべ摘みそへ編みそへへていつたその花束は、今日の日のやうに清麗で朗らかでそしてせん、細ですつかりロココの佳人のやうに出来上つてゐた。

その花束を持つて、それから小さな瓶にあの此所のよさを凝りかためたやうな味ひのクリームを積めて貰つて、それから所長に頼んで十四歳の牛飼の少年を借りてカバンを背負つて貰つた。

蜂にさされて介抱してやつたコリー狗も、牛小屋にゐる昨日生れた牛の仔にもみんなおさらばよ。

少年はカバン二つに私と自分の辨當まで背負つて先へどんどん行く、毎日上り下り

する所だから平地を行くやうである。廻りには山の絶頂まであつちにもこつちにも少年の友達の牛共は急な傾しやを平気で草を食んで遊んでゐる。

花束を折々秋風のさはやかな空中にかざしてみる。それからクリームをぼちぼちなめ乍ら幾つかの牧場の柵を乗り越えて、山上の最後の線にくると突然あのなごやかな美しい風物はなくなつて物凄しい野性の山の姿にかはつた。

手入れをしない森は原始林のやうになり、牛を襲ふ狼のでさうな氣がする。私の立つ頂上の足許から急に山は逆おとしになつて一めん森林と森林との間を背のかくれ程の高い尾花が波をうつて谷の底まで瀧のやうにすぐ美しい。右も左も人氣のない深い深い山である。

よく見るとその薄の海に一直線に細く細く筋が入つてゐる、道ではないが山の防火線の筋だつた。

その一尺あるかなしの防火線の筋目を傳はつて尾花の海を越して私と少年はまだ七八キロを信濃佐久郡のやや人馬を通じる山の中の鑛泉まで下つてゆかうとする。

潮の香 (南伊豆)

五月の晴れたつよい太陽は、山の青葉も土も水も、それから眼の下の大海のきれいな鹹からさうな碧い水も砂濱のところてんの山もみんな蒸れ上らしてむんむんとした気が立ちのぼる。この五月晴れのぼうつとするやうなカクテールに酔つて道を行く人間共はのぼせ上る。

自動車の奥の隅で、私はこのあまりにも盛んなる天地の陽氣にけをされてうとうとしてゐた。

車はいま白濱にちかい海と山との絶景を通つてゐるのである。

『やあ素敵すてき』

『いいねえ、描きたいねえ』

こんな聲がこもごもにうとうととしてゐる私の耳に入る。

時々薄眼をあげて皆が讚嘆する窓外の景色を人間越しにのぞいて見る。何しろ一臺の車の中に運轉手を入れると八人の人間が積みこまれてゐる。地元案内側の男性諸君の大きな背中が三つ、我々の先達には詩女人深尾須摩子さん、畫家の藤川榮子、三岸節子と私といふ三人の仲よしが、なかよく奥の方につまつてゐた。斷崖のカアブの多い道である。

高い所から見下すと海の水は深いところまでよく底が見える。白濱といふ名だから砂は水の下も白く海の底までほんとうにきれいである。昨日からいつも前面に見えがくれする、遠い沖の島々、伊豆の諸島もいくつか見えるのであらうし、伊豆の海の描寫も澤山にあるのだが、初夏の午後のねむりが私を底ふかくひきすりこむ。

前の宵もよかつた。今井の濱といふところで、熱川温泉のすこし先き、曾我兄弟の

父祖の土地河津の庄のそばの濱邊にねむつた。後は崖で前の砂濱は平かで遠淺で、ところどころに、ちようど京都龍安寺の庭のやうなぐあひにはんとうに程よくおだやかな岩があちこちにある。波の音もそんなに枕につよく響かないので、山から引いて来た温泉につかつて快よくなつた眠りをさまたげないであらう。

あらうといふのは、波の音はちつとも氣にならないのに、我々はついにまんぢりともしなかつた。

仲はよくとも三人の畫描きに、心のへだてのない詩人がこうして一しよに展覽會の用でもない旅に出たのはめづらしいので、しなくてもいい今更の藝術論がつい夜半からおつばじまつて海がしらじらするまで續いてしまつた。

夜明けごろに深尾さんは到々隣室へ布團を引つ張つて行つてカルモチンを呑んで来たやうだが、結局こつちの聲が静まらないのだから不眠のお相伴をしたことだらう。

眠られない時は不機嫌などといふのは都會にゐる時のことで、夜があげれば實に氣



伊三つ回つてあ
音

もちよく天地のよさが身のまわりにある。

梅干でお茶をのむひじかけ窓のそとには煙の出てる大島と尖り烏帽子のやうな利島が見える。私はこの利島の姿がすきであつた。先年三宅島へ西風のひどい時期に渡つた時、この利島の住人が、風で船がゆきもかへりも島へ付かないで困つてゐるのをおもひ出した。

島々はすつと遠くて、あの明石あたりへ泊つて淡路の近い島影や舟の影をみながら朝の茶をのむ親しきとはすこしちがふ。あれよりはるけき海のおもひである。

四人は浴衣の裾を子供のやうにまくり上げて潮にたはむれたり、砂濱を馳けたりした。ゆうべは潮にかぶつて、投網をうつと一尺ぐらいの黒鯛が幾尾も捕れた磯の岩の間からは、朝は雑魚や海膽のがぜを拾ひ出した。

ほんとうにいい土地で、今日のゆくての伊豆めぐりがなかつたら此の儘お尻をおちつけて温泉にひたり乍ら利島をもう幾日かながめてゐたいくらゐだつた。

青葉の薫りはなくなつておびただしい海草の匂ひと、人の喧騒の聲に眼がさめると、車は白濱の部落の海濱ちかくを通つてゐた。今がところてんの獲れる最盛期であつたのだ。

これが干したり煮られたりして、今度は高原地方へもつて行かれて、寒中零下十何度でさらされる^とあの寒天になるのだ。真冬の信州諏訪あたりの汽車の窓から、雪のかぶつた枯田に澤山ほしてあるのがよく見える。

白濱をすぎるともう伊豆の突端の下田港は直きである。

下田港はちんまりとした古風な港まちだつた。

半島といふものは突端まで来てしまふと、山もひくくなり、巾もせまくなり、かへつて割合に他奇なく平凡な姿となるらしい。三浦半島の三崎の町がさうであつたが、此處も比較的他奇がない。

かへつて沼津から船で半島の西側の赫い断崖と實に眞青な草木の達摩山火山系を十數米のそばに見ながら深い深い、碧い碧い海をゆく方が繪畫的印象的であるやうだ。

然し港口を一步出たらこの徳川末期その儘の古風なささやかな港は突然どんな印象的な風景となつてゐるかは知らない。

その港の入口ですぐ二尺三尺の鯛や何か釣れるさうで、宿の應接間にもその自慢の獲物の三尺もありさうな魚の墨で型を取つたのが額になつてゐる。

此所も土地開發のために、小松原の海岸へ何所ぞから温泉を引つ張つてきて、新しいホテルが出来てゐた。設備は中々いゝ。

この宿が出来るまでは大方、この古風な町にふさはしい古風な設備の兼業旅館で、風待ちの船乗りさんの酒宴の騒ぎでも隣室にきき乍ら眠られないのをかこつたものにちがひない。

大廣間へ招かれて御馳走に下田美人が『唐人お吉を』踊つて見せた。

土地うまれの若い娘のひとりには、みづみづしくてむつちりして背がすらりと高くて建康的で初鯉のやうに新らしく、ほんとの下田港の青葉と潮の匂ひが感じられた。

廣間の縁の欄干に立てばあの鯛がいくらでも釣れるといふ港の入口も小松ごしにすぐ近くに見える。

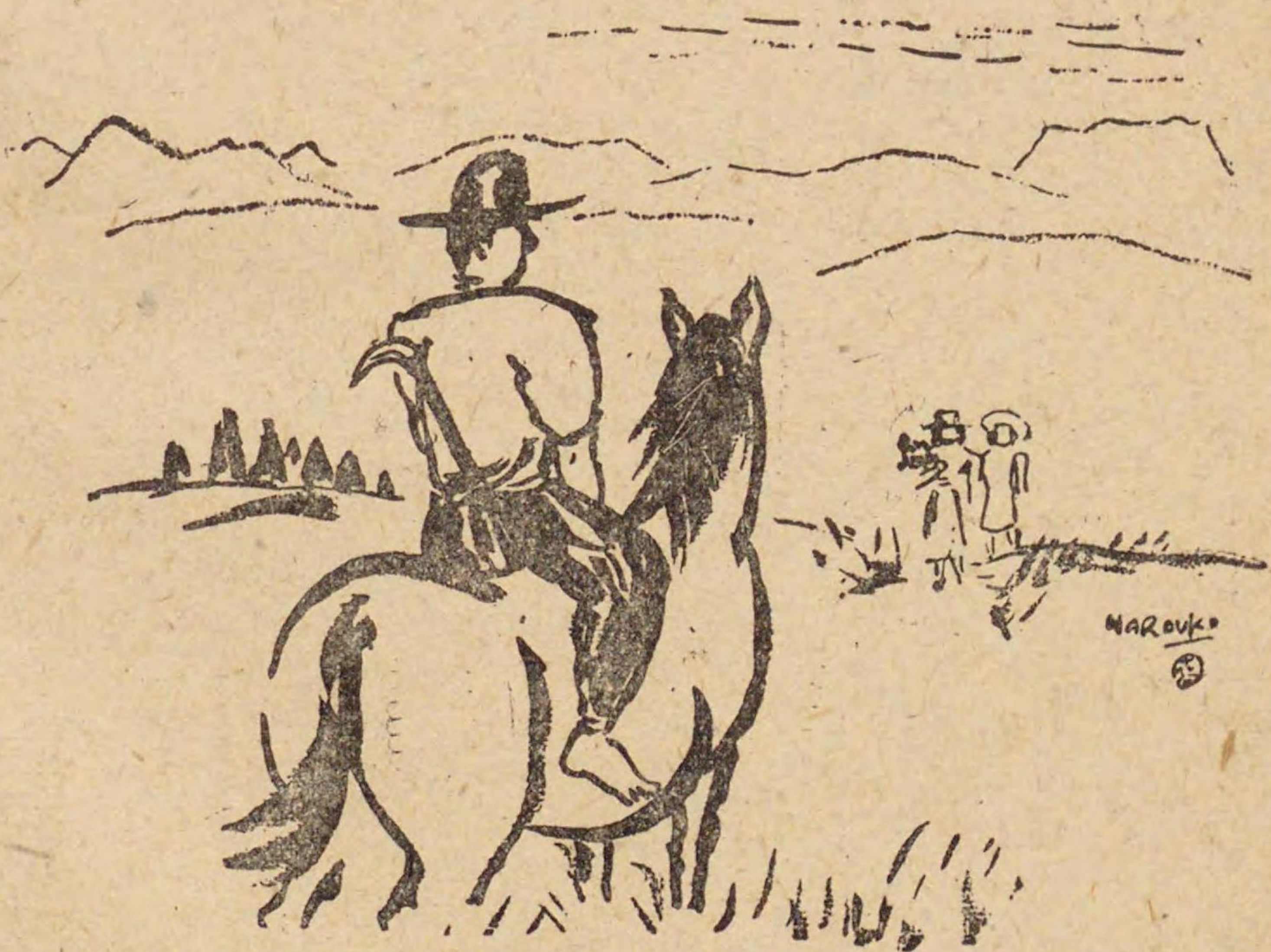
蓼科高原

「××ホテルつてよくもあんな所に
辛抱してゐたものですね、行つてびつ
くりしちやつた」

今でも輕井澤の好きなあるブルヂョ
アの若夫婦は呆れたやうに歸つて來て
から私の顔をながめた。

又或る知人からハガキが來た。

「あなたの文章で讀んだので休暇を



利用して此所へ來ましたが、どの宿も超満員、虚弱兒童がギヤアギヤア、早速諏訪へ
逃げ出します」

此の人にも多少氣の毒なおもひをした。二者とも私には淨穢二つの區別がつかない
のか知らと云ふ顔であつた。又此の話題が出た時、私の顔をまじまじ見てゐるのが可笑
かつた。

普だんは一流のホテルへ泊つてもやれ寢臺の具合がどうだの、パンやバターがうまく
ないと困るのだのと云ふ私が、友人達が呆れ返る程な宿に約二ヶ月も平氣で滞在して
そこで書いた短い文章は非常に愉しさうであつたのだ。

山の湯の宿で簡素でよく田舎つばい中でも殊に私の泊つた宿はお尻から一番であつ
たらう。建物は遠くからはぎ然と海拔千五百米の高原に建つてゐるが、近づいて一歩
中へ入ると人は仰天する。木賃宿の大きいといふよりもつとうまく云へば、泥だら
けの犬下駄箱みたいな家で——多分前身は製絲工場のお古か何かであつたのだらう。

一階はうす暗く二階で兒童達が跳ねると塵と鼠くそがばらばらおちる。二階はちよ

うど商人宿の體裁、すすけた襖が破れ、新聞紙が張つてある。三階がや、や、まして、あちこちで買ひ集めた新古の建具がまぜこぜに敷居にはめこまれて、兩側に並んだ部屋のとつ先の方は廊下のばたばたが少なく、やや靜かに暮せるが、各階に夜はとぼしい自家發電の電燈が幽靈のやうに灯されて新聞も讀めないので仕方がないからすぐ寝るばかり、すると蚤が猛烈に待ちかまへてゐる。寢床の周りを滿洲の匪賊の防禦の鐵條網のやうに三重位にのみ取粉をまいても、少しの隙でも決死で彼等は侵入して來る。おまけに西陽は室へ一ぱいに通り越して裏廊下まで射し込む、こゝにいふ宿の食べ物も推して知り給へ。

又知人は云ふ。

「景色だつてもつといふ所があるよ、大した事はない」

私はさうは思はない。前記に並べたあらゆるものが、兒童のばたばた鼠くそ降り、蚤、下駄箱に等しき宿の不潔、その食べ物、おまけに朝ばん泉のやつと體温ぐらいのぬるいべたべたする温泉、それ等の萬事にふさはしい浴場の設備、これだけを取り除いて

しまふとあとは素晴らしい高原だ、私の貧弱な經驗ではまづ理想の高原とおもへる。山は高くても低くても姿が印象的でなければ駄目だ。そしてそれが三千米位の標高を持つとやつぱり特異で味が深い。

この蓼科高原は蓼科山と八ヶ岳との二つの火山の合作高原で、小海線からはそそり立つて高く見える一個の八ヶ岳が此所では廣い高原の縁の八つのぎざぎざに過ぎない。そしてそれが直ぐ間近にはない程廣い。その八つの内のあの三千米餘の赤岳さへもお城のへりの塔の可愛い一角である。つゞく蓼科山は八ヶ岳よりはやや低いがまるい饅頭山で、登山には中々の悪山なのださうだが、月でも出ると、

信濃なる蓼科やまのまろ姿——

とでも歌ひたいやうに、あの奈良の三笠の山のスケエルの大きな姿である。その右手から直ぐひくく鰐がねたやうに霧ヶ峰が長くながく、スコオブをゆるくゆるくのびてゐる。其所へちやう度夕方は弦月がかかる。下の峰が平に長いスコオブなので空の雲もその上は平らかに何時でも翡翠の琅玕のような夕空には横雲が幾段にもなびい

て、その雲の棚からひくく、宿に見てゐる人間よりもひくく夕月と宵の明星とが眼をばちばちやつてゐる。

そこから十五里あるか二十里あるか、遠くにアルプスの連峰がちらりと見える、槍がわかる。その奥に丁度窓から見入る人の真正面に木曾の御嶽がちよつと寫真でみたケエブタウンのテーブル山に似た形で、一と目でそれとわかる。よく此の嶽の上には入道雲がある時は黄金色に光つたり又ぶらちな色に輝いたりいつも立派だ。

續いて木曾駒、赤石白峰其他の高山があるのだが、不思議に高くとも幾重に重疊してゐるようとも特異な姿に乏しくて、只人はあの邊が伊那だのあの後が高遠の町だのと云ふばかりで山の姿を讚めない。

東の端の雄は甲斐駒に鳳凰山、駒ヶ岳の冷たい峨々とした姿を近くでふり迎ぐのは私の中央線の旅のいつでもの愉しみである。いつも紫黒の雄々しい姿はここから見ても矢つ張りいい。

これで高原のへりの八ヶ岳に圓く連絡して此所の宇宙は此れだけの内にあるのだ。



此の山々を遠く近くへりに圍んで此の宿から先きもまだ八ヶ岳蓼科まで三里づづ、下の茅野の驛までもたらだら下りの四里、それが此の高原のさしわたしで幾キロ平方あるのか、大きな樹も大してなく海拔五千尺に近い火山土の高原には一ぱいに秋草が亂れ咲く。軽井澤あたりの花より色がみんな淡くさびしく、蜜蜂と小さい山の蝶が澤山飛んでゐるが、蜂の蜜も南國伊豆邊りの蜂蜜とは濃さもあまさもすつと軽い。

ある趣を持つよき風景に添へてよりよくする人工建設をする事を知らない考へない人々は、此のいい高原の真中に驚くべき殺風景以上のいとなみ——宿館とバラックの賣店と貧弱なる別荘——をしてしまつて、ゆきすりの旅行者の印象に此の高原のよきまでをすつかり塗りかくした幻滅の思ひをさせる。

若し此所のよさと味ひを理解する營みをしたなら、高原の風趣を味ひ解する人が更に日本に増えよう。山岳や何かと違ひ高原の愉しさはすこし長く止まらなくては解らない。

折柄、患つた後であつた私は、此のかなしき殺風景のふんる氣から毎朝起きると、

すぐ新聞と本を持つて逃げ出して四五町も上るともう高原には一人も人の姿はなくなる。木蔭で草花の中で成るべく終日をすごす。雨の日には獸の如くあきらめて下駄箱の中にとぐろをまく。

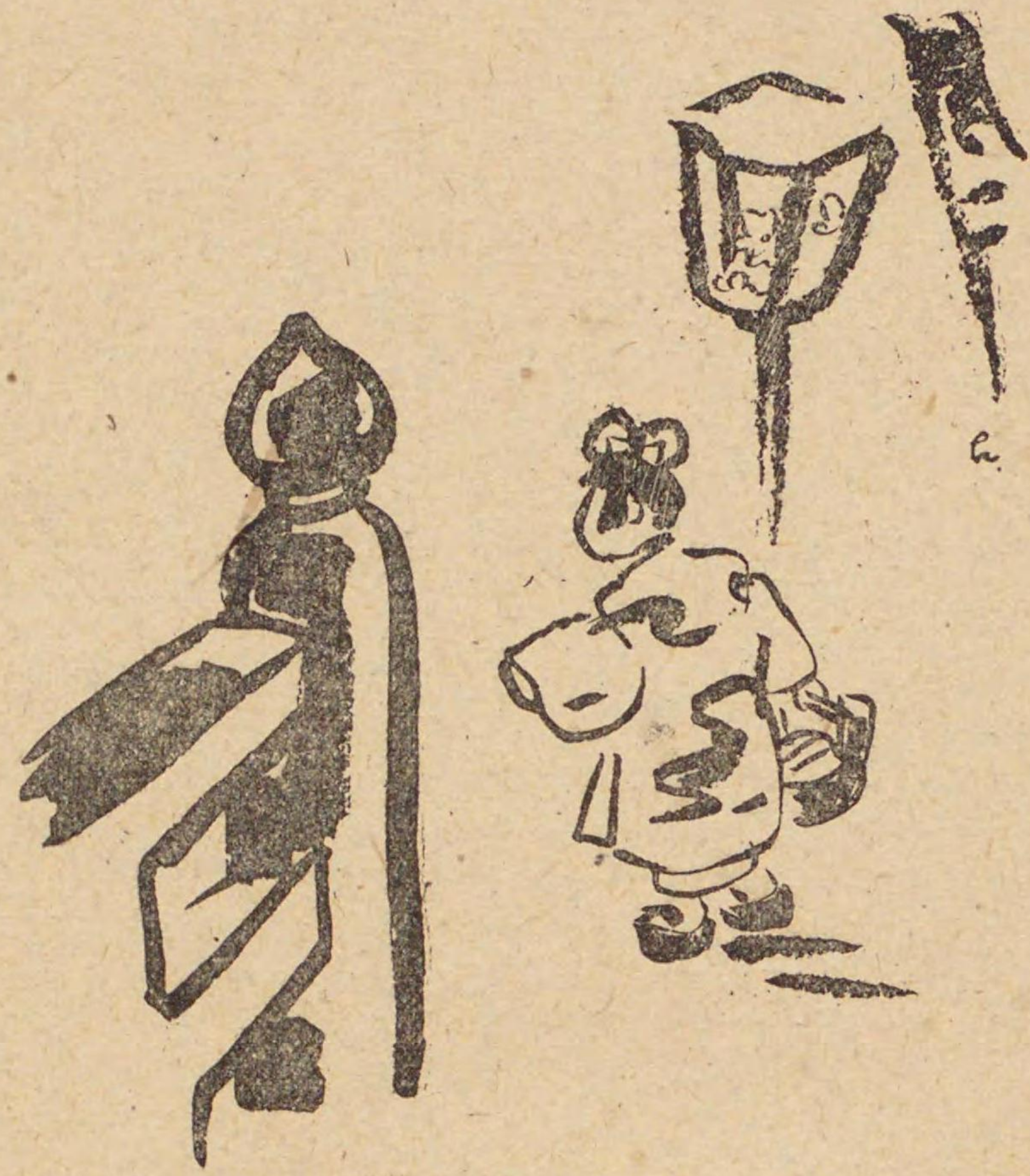
高原の空氣の爽やかによい事は、シャンパン酒の冷やしたやうに味がいい。日本の人は空氣の味のうまさやまだ味はふ人が少ない——だからあの省線内の雨の日の惡氣で平氣なのだが——私は東京の郊外へ出ていい空氣を胸一ぱい吸はうとしては、いろいろな都會のカスの臭ひでそれも出来ないのを何日ものろつてゐるのだ。

或時は山のうまい水を澤山呑む。この空氣とこの水の二つのうまさに別れる事だけでも都會へ歸つてゆく事の悲しさよ。

冬になれば時たまスキーヤーが霧ヶ峰から廻つて來るだけで、猿と鹿——羚羊らしい——ばかりの世界になる、その邊を時々麓の方から山の衆が辨當と水と鎌とを持つて裸馬へ乗つてぼくぼくやつて來る。時折はまだ都會の女を見て叱驚して眼を圓くし足を止めて動かなくなるかはいい若駒もある。

此の邊へ端西やドイツあたりにあるキウル・ハウスでも山の家でもいい近代的なバ
ンション質素で家庭味ある旅館を高原の風、ちを壊さずの一つだけぼつりと建てて、あ
とは無にしておいたらどんなによからう。今のごちやごちやな夏期部落をあれより上
へは蔓延させたくないものだ。

將來の別荘地の爲めに溪水を引いた新しい小川の未だ石のない赤土の中を走つてゆ
く美しい水の邊で、ひとり草を採り花を摘み色彩よく花束を編んでゐると、いつしか
にかつておぼへたスイスの山の小唄をうたひ、蝶や草花に向つては優しい調子で人間
のやうに私は話しかけてゐた。



春 宵
道 後 の 出 湯

案内記によると、神功皇后御遠征以來の——但し傳説か實説かそれは私には解らな
いが、まあ兎も角、伊豫の道後の温泉はそれくらゐ古くからあるので、古湯の方では

おそらく日本の一、二の名湯である。私の貧弱な日本古代文献のひろひ読み智識の中にも道後と攝津有馬のいでゆの名はあちこちに出てきて覚えてゐるくらいだ。

今夜はその道後温泉へ泊るのだと聞けば、何だか遠い古い親戚へ泊りにゆくやうな懐かしさと愉しさを感ずる。

汽車の窓からは、薄ぐもりのぼうとした春の日に、内海の大小の島々と、小島よりもつと小さい岩と、初め島かと思つてゐると線路が廻るとそれが我々の踏む地つゞきの四國の小山や丘であつたり、海邊には所々に鹽田があつたり、磯馴松の古い根がつくばつたり、陸の田にはお百姓と牛がせつせと働き、麥の青と咲き出した櫻の花の間を白い手甲脚絆で四國名物弘法大師八十八ヶ所の御遍路さん、我々東京人は順禮と呼ぶ人々が、みんな伊豫の國から讃岐の國の方角へ同じコースに歩いて来る。一人は少なく、大ていは同行何人かづつでハイクつて来る。

驛の名や町の名に寺といふ字が多い。ひとつ／＼停車しては、ゴットンとまづ最初一つ乗客をゆすぶつてから走り出す地方的な汽車のお客になつてゐると、氣安さから

こんな事にも氣がつく。これは讃岐高松から四國へ上陸して伊豫の松山へ向ふ間の線路である。

然し途中には別子の銅山があつて、時代は軍需期で二等客車の方が三等より混む位だといふが、非常に氣持のいゝ事には東京や京阪地方の列車に殊にひどいあの車中の飲み食ひの残骸が山のやうに溜つて、足許がはき溜の中のやうになる事がなかつた。

この一行の先達は石黒ジウジツ氏である。同勢は私の旅行の古靴からハイヒールのおしやれさんが二人錦沙嬢其他で、あとは東道の鐵道の方の方々が數人で、まことに春らしき楽しき一行だ。我々は鐵道省主催の講演の一行だ。

松山驛へつくと、道後温泉へ行く前にちよつと名所の松山城を鑑賞してくれると市からの御注文が出た。ハイヒール嬢達と巨人クラブの幹事である大石黒さんはちよつとあやまつた體だが、さて百何十米か爽かな汗をかくかいて登つた松の小山の、三重櫓のお天守からのその日の春景色は、若し私がお城の殿様であつたなら、今から直

ぐに高樓の花の宴をひらきたいやうな絶佳な眺めだった。一度も戦争の煙硝にいぶされずに済んだ、此の平和な美しい小さいお城の天守の内部は今でも、お座敷のやうに清潔で最上階には床の間が付いてある。

愛すべき此の金龜城丘は平野の真中であつて城下町に三方を、背後を郊外の田園にとり囲まれて、穏やかに美しい春の平野のすつと先きには内海の島山と國境の連山とがある。

案内嬢が指さすと、城下つゞきの坦々とした大道のはてにすぐ近く、二三キロ米の所に道後の温泉の屋根はつゞいてゐた。

井戸を堀つても沸え湯が出る、砂の濱では砂湯を浴びる。湯が溜まつて大池の何々地獄と呼ばれる位湯がある、海ひとつ向かひの九州別府とこの道後とでは、およそ温泉の様子がちがつて、此處には只二つの大きな浴場のある外には宿には内湯はない。然しいゝ旅館には設備の綺麗な温泉風の浴室が、ちやんと我々のやうなハニカミヤの爲めに小さな溪流に沿つて建てられてあつて湯が沸かしてある。

飛驒の下呂温泉なども古い湯で、一時は永い間湧くのが止まつてゐた事もあるといふのに、兎も角神功皇后様以來二千年ちかくも湧きつゞけてゐる、古い名湯といふ丈けでも珍重してゐる。

町の電車の發着點からは櫻の花の大ぼんぼりがづらりと華やかに並んで、松山以前の古城址の公園にも櫻がきれいに咲いてゐる。宴會用の二階三階づくりの大旅館、又やゝ古風な店がまへの宿屋も澤山あつて、どつちかと云へば道後は療養の湯ではなく、愉しききよう樂の所に今はなつてゐるらしい。

其の晩、石黒巨人は寐しなの入湯につんつるてんの丹前姿でしやぼん函片手、大きな素足に小さな下駄で、まるで明治時代の書生か西郷さんの銅像のやうな恰好でお出掛けの驥尾に付して、私も浴場をのぞきに出かけた。私は洋装の晝間のまゝの旅姿だ。このヘンな對照のお上りの我等は、先づ忽ち春の夜のキツネに包まれてしまひ、大浴場へは出ずに大きな石門に出くはし、入れば兩側には花のぼんぼりの不夜城、これやあ大へんな桃源郷だった。

此の時石黒巨人は如何相成るかと思つて見ると、彼あいにくと今夜は同行連の手前、石佛ぶりを見せて、石の如くにさつさと此處を素通り。

漸くさがし當てた温泉浴場は一寸入口がまるで都おどりが寄席の入口か何かのやうだつた。此處で巨人と別れて私は女湯をのぞくと、廣い大きな石の浴槽の中で、流れておちる温泉を浴びて、老若の女たちがゆつくりとあまり熱くない湯を愉しんでゐる。他にも大小の浴室がいろいろあるらしい。

浴場の二階へ上ると、徳川時代の湯屋の設備を其まゝ大きくしたやうなしつらへで、廣い座敷には座布団があちこちに出してあつて、食べ物を賣りお茶を賣つてゐる。暮や將暮もある。昔の松山藩のさむらひたちは、大かた此處で美しい湯女たちに給仕をして貰つてゆつくりとくつろいだものであらう。

古 建 築

今から十數年前ごろ、幾年かの間、春とか秋とか——秋のほうが日がみじかいは困るけれども落ちついていゝので、大てい毎年秋のころに、秋雨に濡れた黄金の田を見ながら松だけの香にむせび乍ら奈良や京都のまわりの古佛と古建築を見て歩いてゐると學んだ。

大へんなおしやべりでそして元氣ハツラツの素のやうな私にも實はかういふ落ち着いた物を愛し、孤獨を愉しむと云ふいささはづかしいほどしつとりとした一藝を持ち合せてゐる。

更に我乍ら不しぎなのはあの茶を點てることが中々好きで、はたち乙女の頃は人が

もなくともひとりて茶室へとちこもつて茶を點ててはたのしみ湯の沸る松風の音を聞いては悦んでゐた。然しもう長い間そんな事もやらないが――。

そこで其の名残りが今でも沸る茶釜だの茶釜や茶碗などの並んでゐるのをみるとむらむらと茶を點てて愉しみたくなる。先日もついある場所で居合す同席の人々に私は茶の塊り入りの茶碗を喫ませた。久々でいぢる茶釜がよくまわらなくつてひき茶がまだ小さな塊りて茶碗の中にのこつてゐたのだ。

茶の湯がすきだから自然、茶席の建築に興味を持つ、茶席ばかりでなく一般の古代建築にも關心をもつ。然し西洋の石の建築を見て來てからは日本の建築は精巧な指物細工のやうにみんな華しやに見えて、雨露にぢかに曝すのはいたましいやうに近頃は感じてゐる。

法隆寺の夢殿、藥師寺の三重の塔、三月堂、みんな好きだ。中でも藥師寺の塔には時たま逢ひたくなるほど好きである。それから吉野山の奥のたしか吉水院の俗に義經の居たと傳へられる廣間、どこがいいかと云ふとあの華しやで然も古雅でのびのびと

した所がいい。

夢殿や藥師寺の三重の塔や三月堂などは外から見たのがすきなのだが、この吉水院の廣間は中へ入つてすむ家として愛らしい。金閣寺の三層は外からも中からも好き、醍醐の三寶院の書院もいい。秀吉ごのみの建築にはきつとまだ私の見ないものにもまだ幾つかの愛すべき家があるにちがひない。

それから、私の乏しい見聞では紫野の大徳寺の内外にもすきな座敷、すきな一隅がいくつもあつた。

眞珠庵の奥にある御所の中宮さまから賜はつた可愛いお座敷なんぞは、女性の室だけに私の身も心も和やかにするほど何といふ事なく好きである。大徳寺にはこの眞珠庵でもまた本寺や末寺にも、たとへば臺所の一隅にも廊下の曲りにも、縁さきの井戸側のほとりにも好きな小部分があつちこつちにあつた。

宇治の鳳凰堂も好きだけれど、あんまり庭や周圍が當時の趣きを殘してゐないの
で、私は眼をつむつて古繪卷にある藤原時代の林泉庭園のありさまを添加してこの美

しい建築を往時にかへしてたのしむのだ。

今は片鱗さへもあるのやらないのやら、淀のあたりに秀吉がしつらへた御殿は風物と調和して、どんなにか好いたらしいものであつたらう。桃山、聚樂第完全なものが今は一つも見られないのが惜しい。何しろまだ天下を取らない時分に戦争用のお城をこさへてさへあの姫路の白鷺城のやうな素的な天守をこさへる普請名人の秀吉だ、こんな人が今の世にゐて都市計畫でも立てたのならそれこそ末代までの素晴らしい大東亞の都會ができるのだらう。

秋草の風景

もし私が若い獵犬であつたならきつと四圍を縦横無盡に走りまわつてうれしがつたであらう。また今身の廻りに無心で飛んでゐる山のちいさな紋白蝶であつたなら、友だちか相手の蝶々と一しよに、一めに咲いてゐる秋の花の花芯へ顔をおし込んで、ほのかなそのいい匂ひに酔つたり香ばしい蜜をなめたり、それからひらひらと空へ舞ひ上つたり草の間で隠れんぼをしてたはむれて、此の稀れに見るいい初秋の日を生命のかぎりに愉しむ事であらう。

かういふ時には世にも果敢ない蟲共や、犬のやうに充分に振舞へないのが、むしろ彼等の方が羨しいとさへも、元來が甚だ單純で本能的に大へん自然を悦ぶ私には思へ

るのである。

澄み切つた碧い天の下には、奈良の若草山を巨人にしたやうな信濃の國の蓼科山が眼の前にあつて、私の立つてゐる其の五千尺の中腹の高原は右手に一萬尺を僅か數尺を缺くといふ八ヶ岳の八つのぎざぎざを城壁のひだにし、一方には霧ヶ峰が主神の脇にかしこまる獸のやうに蓼科山の足下によりそふて長く長く巨大な鰐のやうにねそべつて、此の何十キロ平方の小天地を造つてゐる。そしてその天地の中にあるものは只上等な冷やしたシヤムペン酒のやうなおいしい、爽やかな空氣と秋の草ばかりなのである。

よく見れば木も所々に落葉松の濃い青の塊りと、白樺や雜木の群落もないではないけれど、全體の印象としては氣がつかない。又夏の間、蟻のやうに其の一部に集まつてゐた人間の大人と子供も潮の引くやうに麓の方へ下つてしまつて、今は散在する數軒の家にせいぜい數人づつ人間が残つてゐるのであらう。

そこで今この廣野を我世のものにうたつてゐるのが秋の花と蝶々と、蜂蜜屋に飼は

れてゐる蜜蜂だけで、それもこれも然しほんの一と瞬きの榮耀で、二度三度更に冷めた、雨が降りそそいだなら、山の奥から猿の群れや野鳥が出て來て紅葉で燃えるやうな色の高原を馳けまはる時季になつてしまふのだ。

春のさざ波のやうにあるかなさかの山のひだ、高原のくぼみからはあちこつちに水が湧いて草の間をちよろちよろして、それが二つ三つ集つては細いせせらぎとなり、小溪流となつて谷間へと走つてゆく。手で掬んでのもそのうまさ、私と一しよに赤とんぼや小蟲も水をなめてゐる。山の蟲や蛇はみんなこの水を賞美する贅澤者なのであらう。

下界の秋草の主なメンバアの桔梗やおみなへしやわれもこうは八月の候に咲き切つてしまつて、松むし草も初秋の空には盛りをすぎかける。其の他のいろいろな花がさいてゐるけれど、私にはかういふ高原は、何とも知れぬ野の花、山の花、半ば高山の花のいづれも遠慮ぶかいやさしい小さい花で、ひそやかな匂ひと色の、よく響和した小交響樂であればいいのだ。

信濃の山の草木の色はやや腺病質で薄いやうに思ふ。そこで信濃の國の畫描きはそのせいか黄色の多い緑の色を描いて都會へ送つてくるのがわかつた。その草木へつく花であれば、更に高原の花であつてみれば矢つ張り色彩や形はややさみしく、せん細で匂ひも強くはない。それを集めて貯へた蜂蜜を味ふときには人はその軽い上品な味はひをかの南海のへりの蜂共がオレンヂや其他の果樹の強い甘さの蜜を造るのと比べて驚くほどである。

ちよろちよろ清水を掬つて飲み、花へ顔を押しあてゝかすかな匂ひをかぎ、天をふりあをぎ白雲の巨船が碧海を渡つてゆくのを見おくり、口へ入れたら溶けてしまひさうな半かけの白い月を見てゐると仙人といふ職業は成程よからうと思ふ。然しこの小天地は己れを無にした東洋の仙人的の神るん漂ぼうなものより、自然と共に悦び遊ぶ詩女ノアイユ伯爵夫人のあの可憐な境地であつた。

私は蟲に話しかけ花と語らふ。彼女達の可憐な繊細美をほめてやる。お天陽さまですが、下界にゐるともう今頃は意地悪の年増女の眼のやうにきらきら邪けんな秋日の

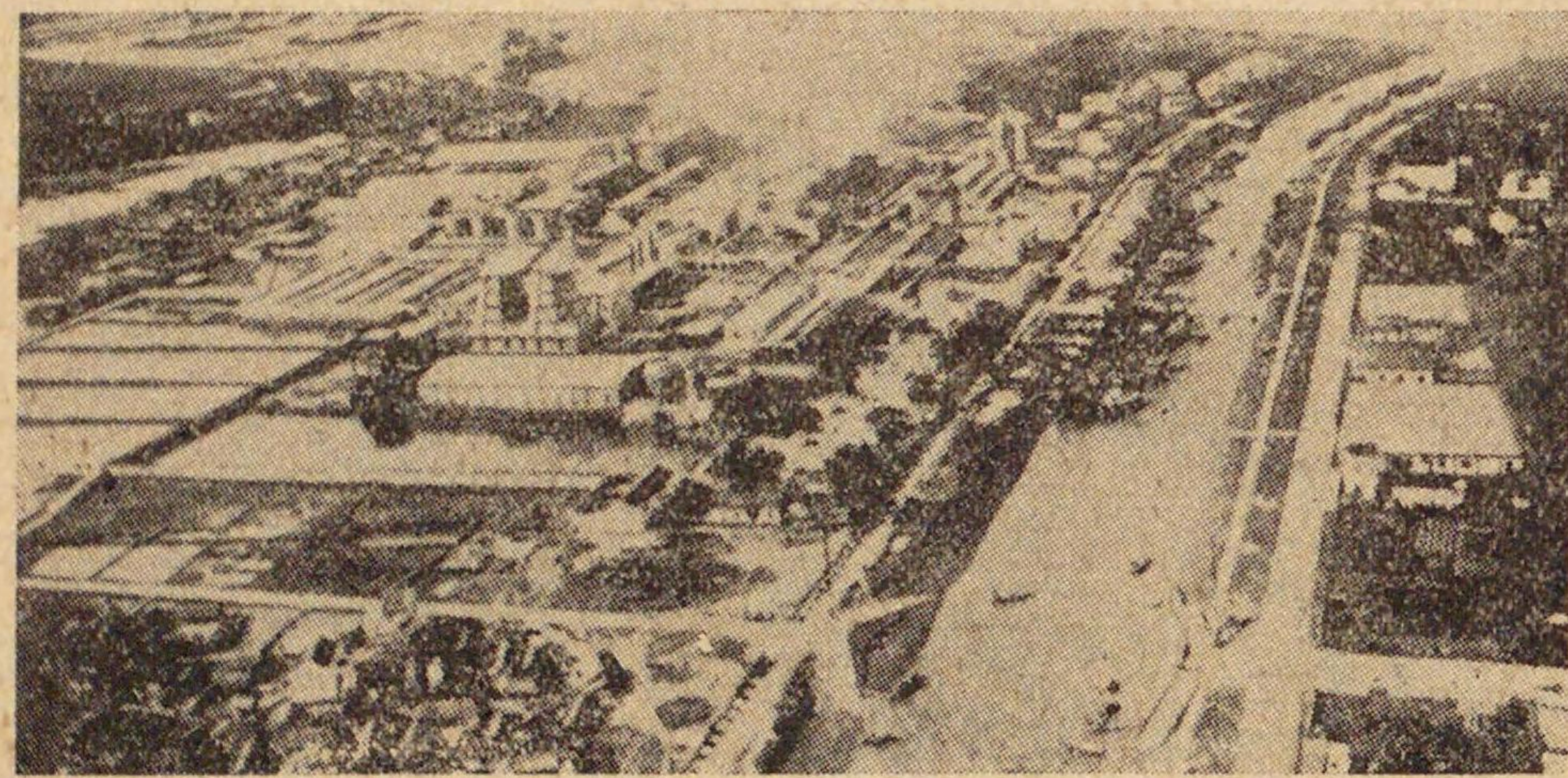
光線でさし通すのに、此所では優しく朗らかで今蓼科の山の肩をはなれて中天かけて動いてきてゐる。

私は抱へきれない程、秋の花をたくさんに、いつの間にか摘みあつめてしまつた。突然物音がした。小馬が一匹眼をまるくして私の前に突つたつて動かうとしないのである。素牧な動物はこの天地に存在する筈のない異様な人間の女性に出逢つて驚きを表情に出してこちらをみつめて居る。彼も體ぢう一ぱいに秋草の刈られたのを背負されて僅かに小さな首とその四つの足だけが草のかたまりから出てゐる可愛ゆらしい姿であつた。

佛
印
雜
記

河内と海防の時の景情

歐洲でフランス本國があんなにも
ひどく參つて了はないまでは、佛印
の佛蘭西當局は日本人に對して實に
無しつけ極まる態度をしたものだ。
ちやうど、私が河内に滞在したこ
ろにはそれが實に露骨で、役人たち
は勿論のこと、あの御世辭屋の佛人
商人、一般市民に至るまであらゆる
佛蘭西人の男女は、その筋のお達し
によつて、我々と交際などはおろ
か、物を買はうが、お客になつて滞
在してゐるやうがぶつりとも口を利か
うともしなかつた。只あるとか無い



海防市街

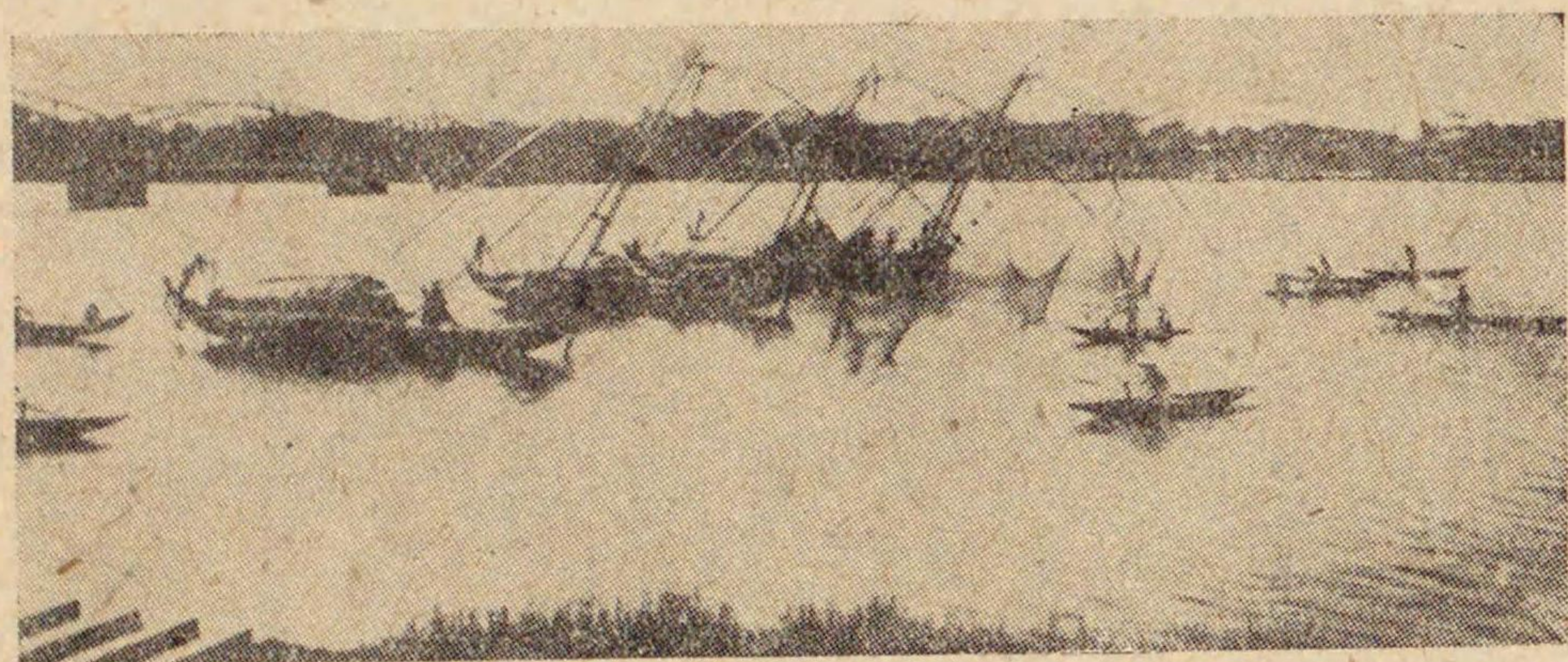
とか、幾何であるとか、可か否か只一言返事をするだけで、あとは啞のやうに黙りこくつて我々の前に立つてゐる。あのお饒舌で一度口を開けたら、たとへ男だつて身振り手振りで止度なくしゃべる國民がさうであつたのだ。

丁度私の旅行時期は歐洲大戰が正に始まらうとする時で、行末を案じて此所の佛人の心中も暗たんとしてゐたせいもあつたらうが、然しまさかこんなにも早くあつさり獨逸人に打ちのめされようとは自惚も手傳つて見透してはゐなかつたのだ。只獨逸の強力な友人のごとく見える日本人がシヤクにさはるのと、援蔣のお蔭で急にこの東京省方面、殊にハノイや海防が恐らく開びやく以來の景氣で、大いにもうかる愉快さや、——そのくせ心中、支那人はあんまりすかないのだが——それから最大の原因は何といつても口にこそ出さね、バイアス灣と海南島に皇軍が上陸して以來、佛印の土人が未來の夢をやつと楽しく描けるようになったのと反對に、佛人の方は何か悪夢にうなされてゐるらしい。

佛國の植民地でも一番果のはての、みいりの少ない瘴癘の地へ來てゐるのは、多く

は植民地役人のごく頭腦のわるい連中で、ことに戦争の始まる半年前に、本當に佛印や東洋事情にくはしい人間や、日本人と交際の深い役人たちを本國の政權利權屋の都合上止めさせて、新しい不馴れの人間にすつかりかへて了つた。殊に當時の總督は植民地で金もうけにかけては兎角評判のある左翼出の植民大臣の引つぱりの人間であつた。この總督は今親英政權側で何所かへ逃げ出して了つたが、飛び立ち際には相當搾取したしろものをどつかへ持つて行つたといふ事だ。

かう云ふ當局者が悪夢のタネにはなつても、あんまりもうけのない日本人に對して極度の近視眼的に頭腦のわるい所を發揮して露骨な状態を示してかゝるのだから、我々は彼等の心中にたとへ一種のびん然たるも



ハノイ・ソンコイ河 (紅河)

のを感じて苦笑してはゐながらも、日常の不便いふばかりでない。

その時ありの儘に、この河内、海防の情景情勢を書かうとしたのであつたが、また国際状況が此所まではつきり来る所へ来てゐなかつたので、若しさはる事があつたり、下らぬ所を刺戟してもいけないと思つて、私はごく差しさりのない風物か風趣なんぞの事ばかり今まで成べく發表してゐた。

當時は我が總領事館などは、町の中の孤島であつた。總領事館の門の向ひ側の家の壁には小穴があげられてあつて、必ず二つの眼玉が其所からのぞいてゐた。

安南人の市民などがうつかり我が總領事館へ出入をしたら、早速引つ張られて痛いカライ眼にあはされるから、後難を怖れて彼等はちつとも近付かない。そのくせ安南人はこんな鎖國の中に置かれて、何にも知らせないやうにされてゐても何時の間にか日本人が自分たちの救世主だとさつてゐるから、蔭では非常な尊敵と好意をさへげゐる。けれどももし傍に佛人がひとりでもゐたら知らんふりをして寄り付かない。安南

人ばかりではない日本人にせよ領事館の出入はちやんと一々向ひの窓の眼玉がしらべてゐる。

此所には諸外國の使臣はゐなかつた。領事館も日本と支那——支那人は東京省だけでも十數萬ゐるのだ——あとは歐洲でたしか伊太利亞かどこかが一つあるだけで、アメリカのもイギリスのものもない。それで鈴木總領事夫妻も諸外人との交際はななし、又佛印當局とも交渉も交際も殆ど中絶してゐるまでは之も時局柄止むなしとしても、たとへば總領事以下の館員が釣り堀りに出かけても敬遠をする。二度目に行けば佛人は誰も來なくなるといつた無禮さだつた。

それがまあ何と今は猫の眼玉がかはるやうに今日この頃は毎日毎日日本の陸海軍の出先き當局や——今までは少し體つきのリッパしい普通の人間を見ても軍人と疑つたくらゐで、ほんとうの軍人は一人も滞在して居られなかつたが、それと長いこと、失敬失禮な眼に散々あはせた同じ總領事以下を今更らしく國賓珍客の如くに、正式、公式に佛印側で招待や御馳走をしたり、向うからあいさつにやつて來たりする記事を讀ん

だり、ニュース映畫で佛印總督以下が日本の當局者にいとも町重な場面、佛兵のささげ銃などを見ると、痛快にも思ふし、よくも手の裏をかへしたやうなこんな事が出来るものだとも思つて可笑しくもある。更に又ちつとふびんでもある。

領事館員の中でも殊に今は南京へ榮轉をしたH書記生や、囑託をしてゐられた西田大人などは居留民の方を受持つてゐられた關係から一番煙つたがられた。H書記生は昆明にゐて龍雲なども知り合ひであつた人で佛人との交渉がないセイか目の敵にいやがられて、釣に出かければ必ず待たしてある自家用車の中は引掻きまはして調べられてゐる。

其の上更に怪しからぬことは蔣介石の特務機關の活躍には、まるで自國內のごとく自由に振舞はせてゐた。H氏などはよく重慶の兵隊をお供に連れて自動車飛ばしてゐたものだ。

國境ですつと以前に支那側に捕へられて、たしかまだ桂林あたりに監禁されてゐる某書記生も如何に國境にちかい所とは云へ、自國の領土内でこんな事があつてもフラ

ンス側は平氣でゐると云ふ言語同斷さである。

それだから以下の會社とか其他の日本人の仕事は云ふまでもなく休業同様手も足も出なかつた。何を先方側へ頼んだつて、木で鼻をくくるやうな態度で、事が一つだつて運ぶわけがない。三井のホンゲイの石炭、臺拓あつかひの鐵礦、カムラン灣の硅砂は三菱商事であつかふのだが、いづれも開店休業、手を空しく引き上げたのもあつた。たまにホンゲイ炭の一隻も積み出せば大したものだつた。

こんな暑いところで、自分の責任の用はひとつもはかどらずといふより更に用事がなく、他とも交際せずに、さりとて引き上げる譯にもゆかないで苦しい暑濕の中に目をおくるといふのも是又ラクな事ではなささうだ。葡萄酒だけは佛蘭西本國なみに安くてふんだんに飲めても、愉しみの場所といつても、うっかり郊外や避暑地や海岸へ行つても迂散がられるばかりだ。市内の娛樂地は、大湖のヘリにあるサンヌウシイ(無愁亭)とか外にも二つ三つある踊り場か、何番館とか俗によぶ町はづれのさる所ぐ

らゐでせめて圓顔淺ぐるのじつとりとした肌の安南娘に近づくぐらゐの事しかない。さうでなければ、舊市街の方にある、古風なちいさな日本人旅館か料理屋でお何さんの九州風の日本料理か、アナミツ（安南人）のベツブ（料理人）のこさへたもので一杯やるのだ。

當時の邦人にとつて淋しいことには此所には二、三人の若い奥さん達の外に、ひとりも日本の若い女がゐなくなつた。この情勢で皆引き上げてしまつた。

日本女性進出が途中で挫折した時があつて奥さん以外の若い女も途絶えた。その前の女たちはみんなもういい年増になつて身が固まつてしまつた。

今度の皇軍進駐で、然しぢきに忽ちかはる賑やかさ、内地半島のわかい娘の進出の世話で領事館や日本人會長の下村さんは大忙しになる事だらう。

海防港の方からきても又支那廣西省から諒山を通つて河内に入るにしても、いづれも河内の町にそふて流れるソンコイ河（紅河）の二キロ米よりもすこし長いやうな氣

がする橋を渡らなければならない。増水期でない時には中央に島と洲の合の子があつて畑も作られてゐる。

そのソンコイ河を河内へ渡す唯ひとつの大橋は大分時代もの、鐵橋で、中央に單線の鐵道線路があつて、そこは枕木だけで板がなく人間が通れない。ガンリンカーと汽車はこの只一本のレエルが、或時は昆明へ直行する老開方面行、又廣西國境の諒山行、海防行もみんなこの上を走つて行かなければならないのだ。割合に狭いレエルの幅である。

それからその橋の兩側にだけ、橋板を置いて、自動車、トラック、牛、馬、人力車、人間がみな通るのだが、幅がせまいから、若したつた一人の老車夫が貧乏で飯を充分たべられないでひよろひよると先へ走つてゆくか、牛なんぞにのそりのそりと歩いてゆかれたら事だ。あとに従ふ自動車は何臺たまらうとあせらうと、牛の歩みを真似なければならぬ。

あいにくと飛行場が河向うだから、其所へ急ぐ時などは大事で、さんざん後ろから

ぶうぶう鳴らし立てられてやつとの事どころに橋がすこし出張つた、あまりへ来てやれ嬉しやと牛をやりすごして又一と走りすると、又人力車！ かういふ思ひをして晝間は股賑をきはめる二キロ米餘りの長橋をやつと渡り終るのだ。

河内の市街は總督駐在の政治中心都市ではあるけれど別に商業都市でもないし、市内や近在にこれと云つた工場や特産品があるわけでもないから、割合に落付いたしづかな、消極的にいふいい都である。例の橋から河にそふた方に大體昔からの安南人町があつて、それに續いて佛人の新市街は建設され一部は河の下流のふちまで來てゐる。都市計畫はまだ充分に發達できる餘地を作つてある。

安南人の現在の區域はむかしの商人街でもあらうか、何ひとつ舊の安南王國をしのぶやうな物も残つてゐない、佛人街よりはやく狭い道路と道路樹のない只ごちやごちやした下町にすぎない。

佛蘭西人は此の安南國の經營には、これまでも散々手を焼いて、一時極端にこの河内の古いものを壊した。それと二十世紀の初めに此の河内を襲つた世にも物すごい大

颯風の爲めに破壊されたものも、それを幸ひに取り除いて了つたので、今の河内には安南國時代の城壁も城門もなく、宮殿は一部は残つてゐるらしいが、目につくやうな舊安南王國の面影は殆ど見當らない。

只都市を美しく造る名人の佛蘭西人のことだから、ちやうど、庭の急所へ小さなお宮や石燈籠を色どりに飾るやうな案配に、ところどころに、今のフランスの公園式な柳のふさふさとたれた大池の湖心へ古びた安南の宮殿の小さな三層樓を其まゝ残しておくとか、同じ池のほとりだの、もひとつ更に大きいあの無愁亭のある大湖のほとりとかには、安南風つまり清時代よりもひとつ以前の様式のひなびた支那風の門や寺などをたくみに残して風趣をそへてゐる位だ。

あとの河内の市街の主な町々は、まるであのヴェルサイユあたりをすこし簡素化したやうな落付いたフランスの別荘町であつて、並木は大きく深々と美しくかさなり合ひ、車馬の通るのも割合に少ないしづけさだ。大通りの所々は美しい廣場や公園になつてゐて四季とりどりの花卉が模様風に植ゑられてゐる傍を、はだしの安南女の果實

賣りがおはぐるを付けて前へ帯をたらし、麻の衣を引ずるやうに長く着て、天びん棒の荷をかついで行く。人力車が佛蘭西兵隊を乗せて走る。植民地風の半裸のやうな軽い身なりの金髪むすめが自動車を飛ばす。

例の大湖の方は大きすぎて四周が數キロ米もあつて向う側はもう本當の田舎でさびしい。はづれの例の無愁亭のバルコンで客のすくない晩などたゞすむと眞暗に大きな沼澤に、沖に漁火が幽霊のやうに一つ二つまたただけで、ひっそり閑とした中をいたづらに無愁亭の燈ばかりがあかるく、ジャズだけが人氣のすくない所に鳴りひびくと、何だか新しい怪談でも小説家なんぞなら書きたくなりさうにひどくわびしい。

無愁亭へ行くまでも、もう河内の人家がまばらになつて、佛人の館の間へぼつりと牛小屋のやうな苦屋根のひくい安南人の小屋などが交つて、大雨に濡れそぼつて幌のすき間へ洋傘をさしかざし乍ら暗夜を、車夫の提灯で走つてゆく時などは明治の御代のはじめのお茶の水や丸の内の人ごろし話でも怪談でも、まだ此所なら創作できさうなくあひである。

晝間、或は夕方、この大湖のまはりを一とめぐりすると、向ひ側の方では本當の安南の土民風俗が見られる。市も立つ、古い風俗繪卷物のやうだ。日本の風俗習慣と比べたなら徳川時代、あるものは足利以前のやうなおもむきだ。ひくい海女の苦屋のやうな家々、支那の古畫にあるやうな總髪の老人、又例のおはぐるは男女ともどもで、髪を長くして布で笠しきのやうに頭上へ卷いたのも同じだから、あはてものゝ歐米人には男女の區別がよく付かない。男も女のやうなと云ふより日本の昔の芝居の二枚目か女形のやうなへんな聲を出すのがいやらしい。傍には水牛が四つ足を折つてねてる背中へ鶏が上つてときを作る。そして其の傍には立派な並木のドライブ道路が坦々とあつて、ごくまれに佛人の自家用車がひゆうつと走つて行く。安南人はうつかり引き殺されても僅か命の代金は十餘圓だ。但し昔はロハであつたさうだ。時には打ち殺された。

河内といふ名の通り、大河のふちの沼澤の埋まつた都であるから、何所もかしこも

郊外はまだ水だらけ、増水期は沼澤の中といった方がいゝ位で、百キロ米へだてた高山の上からみた時には、河内平野といふより大澤といふ方がより正しいかと思ふほど、一めん只銀いろに水が光り輝いてゐた。

かういふ土に生れ、死んでゆく安南人は、故に濕氣といふものは平氣らしい。生物なら水邊に棲む蛙みたやうなものだ。濕度は雨期には百プロセントになつて、幾日たつても濡れたものが百度近くのおつさの中でも乾燥しない。彼等のひくき苦屋は無論のこと、道も田も水の底になつても割合に平氣で、家の中から、座したまま水が手にすくへるやうな水位の中に暮してゐる。西洋人に比べては濕度には大分なれてゐる我々日本人でも、これには參つた。一度、鈴木總領事夫人や私は郊外のかういふ有様の中を、竹であんで漆でぬり上げた、一閑張りのやうな小舟へ乗せられたりして半日見物したら、あくる日は二人ともリュウマチになつて了つて二、三日腰のあたりがみりみりと痛んだ。リュウマチのある人は佛印へ雨期にゆくのは禁物である。

もひとつの小湖の方は市中のいい所にある。

佛人商店街のいい所が大部分と少しは安南人町にかかつてゐるが、柳と青草の池のふちをぐるりと散歩して二千米にはやく足りない。例の三層の白壁と朱の古雅な安南風の小さい樓閣のある中の島がぼつりと池中に浮んでゐるのと、もひとつ池へつき出した不忍池の辨天のやうなお寺とが、ミユツセの柳の深みどりの周圍と満々とした池水とに調和して美しく愉しいなめだ。

池の一隅のいちばん、しやれた角にはカフェのテラスと百貨店——二階建だが、それから佛印觀光局のある河内一番のビルディング等がよりあつまつてゐる。其の前の廣場には大樹にステッキや椅子になる籐がまつはり付いてゐたり、ガシユマルの深々とした木影に、花賣りの店が出てゐる。安南娘に蓮の花、それから朱い南國の花、白いシンジャ、紫の花とりぐに山のやうに積まれて、後ろの池には遠く例の小島の樓閣が浮ぶ、誰でも心のいこふ一角だ。

もひとつ池に張りだしたカフェも遠い向側にあつた。これから涼しくなりかける河内の夜は此所あたりが廣西からの勞苦の軍旅をつゞけてきた皇軍の將兵の旅情をな

ぐさめる所であらう。お酒も安いし本場もので銀座のやうなあやしきいんちきリキユールでない生一本が然も大へんに安く味はれるのも、此町の特色だ。

それから安料理でもともかく人間なみの味だ。但しその池の角のカフェは見かけは立派だが食事ほどくまづかつた。メトロポール、スプランデイド兩ホテルに、あとは横町あたりの小店に安くてうまい店がある。私はよく佛蘭西の飛行家のおめかけの合の子の經營する小店で簡單でうまい食事をしたものだ。廣東の沙面のあのユダヤ人の小店の晝めしや、愛群ホテルの食堂、海南島の海口の支那人の西洋料理はあれは實に物すごいものだつたが、あんなもので榮養を補給してゐた事を思へば、ここでフランス料理と葡萄酒がのめるのは大したものだ。

河内市中ばかりではない、地方の小さな都市で安南人が經營してゐても、ホテル某と佛蘭西語で看板の出てる家なら、田舎料理でも相當に必ず食べさせる。

小湖のあたりをぶら／＼歩いてゐると、安南人の車屋さんや、子供の夕刊うり水牛細工の土産もの賣りなどが付きまといつて来る。

水牛細工は、鯉、帆船などちよつと面白いものがあつて、私などは云ひ値のちよつともまければ買はされてしまふが割に安い。然し土地馴れた豪傑は四分の一ぐらゐで美事に買ひ上げる。フランス人はびた一文かういふものは買つてやらない。買つてやるのはたまに來たアメリカの旅行者ぐらゐなものであらう。

ホテルでも、日本人がもてるのは、崇日ともうひとつは氣前がいいからだ、自國內の植民地では歐洲人は土人に對しては搾取するばかりで殆ど金をやらない。フランス人は殆どノウチツプ、支那人だつて吝は天下の公認するところ、其上するい奴は不通用の金なんぞをアナミツのポウイにくれてゆく。

外に観るべきものは、もとの博覽會のあとの物産陳列館、わびしい舊式な儘の安南國の生産物と、未開發の鑛産物、新時代の工場製品は殆どまだない。然し此所には住民の種類や分布、生物其他に關して科學的な調査が陳らべられてあつて、物産よりも佛印全體を知る事のできるものが相當あるから興趣はある。

それから美術館、極東學院は研究所風で會員以外、普通一般の人は入れないが、學者や研究者として聯絡を然るべく取つて行けばそこで佛印資料を調べる事ができるのであらう。此所には半島うまれの同胞金さんが助手として只一人働いてゐた。お父さんが大阪外語の教師をしてゐた人で、佛蘭西人に教育された人だが、日本語もうまい文學青年である。

海防へは二時間おきぐらゐるにガンリンカアが出るし、自動車路も立派なのがあつて、皇軍が、進駐するにも道路はいゝ。諒山方面からも道路はいい。佛印は自動車道路は充分に發達してゐて、あの蠻地ラオス地方へも自動車なら主なところへは入れる筈だ。但し人跡未踏、地圖も細部は不明の地方は別として。

海防と河内の間は他奇のない水田ばかり、途中、部落はちよいちよいあるが、大した都市はない。

海防の方は河内のやうに王城の都でもなし、只河ふちの船着き場が發達したものだ

から、規模は河内に比ぶべくもないが、然し狭いが、家はびつしり立ち並び、物資の集散、市民も町人も元氣である。町も派手でも、立派でもないが相當賑やかだ。

大した建物なんぞはない。公園がひとつあるだけ、ホテルなども格を張る大ホテルは一軒もなく町中の二流三流のカフェと食堂兼帯のやうなフランス旅宿で、日本人旅館は石山といふのがたった一軒ある。

さゝやかな店ではあるが公園の前で、石山老が物すきに小庭に朱ぬりの稻荷をまつつたり、食堂にむかしの文展時代のやうな桃山の壁畫があつたりして、此の家は、これでも排日時代の邦人のオアシスであつた。

船の出入の時は此所へ日本人の主な人が集る。河内からも海防からも。中でも海防の日本人會長の横山さんは三十何年も此所にゐる長老で明朝なしつかりした老人で、碁が初段である。役人も會社員も、ジャアナリストも、此所へ集つた時には必ず碁盤が持ち出されて横山さんにころりころりと赤ん坊の手をねぢられるやうに慘敗する。脇で見ると、平素は天下國策を大言壯語するモノドモが、横山老人に對して白を

つかめるのはひとりもないのが、いとも笑止でおかしかった。

然しこのオアシスを一步出ると、うっかり船着き場も日本人には歩く事を許されなかつたのだ。横山さんだけが昔からの顔でやゝ自由であつた。

香港のやうに山と入江が無数にない只水田にとりかこまれた町だから、援蔣物資のレエル、ガンリン、硫酸の瓶、自動車、其他がすらりとオープンに、あらゆる置場に使へさうな場所には並べられてゐた。

公園の廣場には、郵政局と書かれた新しいトラックがすらりと並べてある。河岸の荷揚げ場所は幾個所もないので、アナミツの男女の荷揚げ人夫が右往左往してゐるがちつともはかが行かなくて只混雑するばかり、アンペラの俄か倉庫がいくつも建てられた。フォードの自動車工場も町はづれのアンペラの乞食小屋である。

もつと何とか抄取らしたくとも周囲の水田はおいそれと埋めたてる事も出来ないし、安南人は荷揚げがやつとの事で、人手が足りない。そして河の中にはまだ荷役が済まずに、無爲に半月も一月も停泊してゐるアメリカ船の一萬トン位のが二、三隻も

ある。

何でも夏から去年一ばいで半年間約六十萬噸の海防あげの援蔣物資とか聞いた。こんな事は強いてセンサクしなくとも、海防の町中を十分もかかつてドライブ見物すれば、眼をさへぎる物もなく陳列されてゐるのだ。

河内にはかへつてまとまつてはなかつたが此所の支那街は一番いい所に一番有力にがん張つてゐる。他の都市でも大體同じ事で、支那人町がすなはち一番の商人街になつてゐる。大都市の外は佛蘭西人の商人は手もまはらず、品も上等すぎて安南人用にはならないらしい。安南人は佛人に搾取された上に、この商利にたけた支那人になげなしの財布の底をはたかせられるのだから、貧乏は益々ひどくなるばかり、だから支那人には好感を更にもたない。

此の海防から自動車で三、四十分のところドゥンと云ふいい海岸があるさうだ。別荘が多くあつて、ホテルもありいい所らしい、横山さんに碁で滅茶にひねられたまけすやのチャアナリストの大屋さんは腹いせに乗船の僅かの時間を此所へ飛ばし

て、うまい白葡萄酒に焼はまぐりでシヤクの蟲をおさめてかへつて來た。近頃此所へも今皇軍の陸海軍いづれかが進駐してゐるさうな記事が新聞に載つてゐるのもなつかしい。

佛印藝術雜記



阿須羅像(奈良時代)

自然不調和なく身につけてゐる美しい女性的阿須羅、それと同じ作者の興福寺の十大弟子や阿須羅と一組の天部八部衆たちなどの彫刻は、他の推古天平のいみじき彫刻群とは精神的に何かちがふ調子をもち乍ら、然もその神品といふ程度に於ては共に日本

奈良の博物館に入つたとたん

に、幾度行つてみても忽ちに私の

魂をうばつてしまふあの正面陳列

函の、真中にすらりと六本の腕と

三つの顔を天衣無縫にすこしの不

にある古彫刻群の中でも最優秀のものである。

この阿須羅を初めて見そめた時から私はこの彫刻の寫眞を持ちつづけてゐながら、そのくせ作者の名の方は今思ひ出せないが、天竺とはまさか博物館の説明だから書いてなかつたらうが、そんな意味に漠然と私はおぼえてゐる。まあつまり天竺は印度なるべしで、印度方面から來た佛師のように私は思ひ込んでしまつてゐる。

ところで、私は印度本土は知らないし、印度系彫刻は現物はまとまつてはコロombo博物館のものしか見ず、あとは寫眞でしか知らない。どうも天竺や獅子國（セイロン）あつち方面の彫刻で、我々淺ばくな知識のもとに知れるものには、この天平時の奈良興福寺に残したあの印度系のよき作者と全然同じ感じのものに出くはさない。

印度系の彫刻がいきなりつよく我々にアツピールするのは、良くも悪しくも肉感的なものや現實的なものが多分であつて、此の奈良の天部八部衆其他のごとき、朗らかなもあつさりと春の微風のごときはやけき感情は少ないやうに思つた。

優婉びめうなること、氣品のすぐれた程度は同じやうであり乍ら、あの六朝の、朝



阿須羅像(奈良時代)天竺問答師作

鮮半島方面から傳はつてきた同時代北廻りの諸佛のそれは、もちつと冥想的でこの朗
かさいゝ意味の甘美がこの阿須羅の一族よりすくない。

ところで佛印へ行つて何か私は卒然と教へられたのであつた。

阿須羅は天平時代、これはもつとすつと下つて十何世紀かだと思ふが、あの佛印の
南部の名彫刻の群、アンコルヅットの古跡のよき彫刻には、その我々の美術史には不
充分であるいろいろのものを説き明すのに役に立ちさうだ。

印度系ではあるが、さて印度本土よりすつと肉體的にアツピールすることがうすく
なつて、かはりに何ともいへぬ優婉を帯びる深みが加はり、そして精神的ではあつて
も朗らかなところがある點、古代印度詩聖カリダアサの詩のそれだ。そして印度のシ
バの女神や、又我々の阿須羅兩者と同じく此のアンコルヅットの神々、若い男性神が
多いが、腕が六本、又は四本が多い。顔はいづれも微笑をふくんでゐる。

思ひ出せば、たしか巴里の例の有名なギメエ東洋美術館にもこのアンコルヅットの

よきものがあつたのであるが、當時は私はまだ佛印に關してさほど關心がなかつたの
で、アンコルヅットをかくまで東亞共榮圏の至寶とは注意せず、たゞよきその彫刻の
みを場所も名もおぼえずに頭の中に入れてゐた。一つには彼のミロのヅキナスヤルー
ブルの勝利の女神や其他古ギリシャの完璧の人間藝術に壓倒されて、優婉びめうで
も、つゝましく半ばはまた原始未完成の殘る東洋のこの石彫をあつさり印象づけて
ゐたにすぎなかつた。

今然し此所には、アンコルヅットの中の名石彫について私は書くのではない。それ
に私の佛印へ行つた當時の情勢は、南のその地方まで女ひとりでは行けなかつた。こ
れからは多くの藝術關係者によつて、否でも應でも北支大同の石窟佛とともに、これ
も我々がよく知ることができ大いに讚へる機會が來るであらう。私は只その一部分を
美術館其他で鑑賞したのみである。

興福寺の阿須羅の誕生とアンコルヅットとは數世紀のへだたりがあり、又調べても
恐らく何のかゝはりがないうであらうにもかゝはらず、何か似かよつた藝術感覺を受け

るのは、それを産んだ土地が近いからであらう。

佛印といふのは寄せ合せた國で、むかしから度々支那に領土的支配をうけた安南東京省地方と、それから南下して後には安南の治下に入った古代林邑といふ國、これが天平あたりと相當交渉があつた國なのだ。又安南國（當時の唐の安南都護府のあつた地方）にも阿部の仲麻呂が漂流したりしてかゝりあひもある。

奈良唐招提寺の鑑真和尚も中支の揚州から出發して海南島まで流されて、廣東を経てゐるから、あの方面の何ものかもたらされてゐるわけだ。海南島と北部安南との關係もだん／＼明らかになつてゆくと思ふ。

林邑の先には交跡、例の茶人の交跡の香合などいふあれ、その先きがカムボチャで、泰國につゞく。これ等の四地方の背骨のような山岳部分をしてゐるラオスは今もむかしも多くは未踏の蠻地である。ラマ教はチベットから此の道を傳はる。

昔の林邑といへば、もう美術の關係のある人ならこれはもう説明はいらなからう。だから、古代の林邑國であつた安南中部の都順化（ウエ）の美術館あたりを見れば、

我々の以前から見つけた様々のゆかりの品、伎樂の面、それから舞樂の羅陵王そつくりの服裝、あれもこれも、はゝあ成程と思ふやうな事が澤山あつて、我々東洋の古代美術史は今までは支那ばかりで、あとは印度が少々、これだけではこなし切れない長い時間の不審の穴はかなりあつちこつちが佛印の委しい研究でどん／＼と大部埋められて行くであらう。

北部東京省方面、河内清化其他には明時代の匂ひがかへつて支那本土よりつよく残つてゐる。これはあの勇壯なる明の永樂帝に十五年の間治下に入れられて極度の明風をとり入れさせられたせいである。支那本土は其後の滿洲族の清朝や太平天國や様々のことがあつて、風物も改まつてしまひ、かへつて邊土の方がこうして残るものであらう。今でも明時代の生きた繪卷を見るやうである。その古風なこと、何だか一世紀くらゐ前の世の中に呼吸するやうである。其くせ、主な都市はそつくりフランス風の殖民地、田舎といへども舗装道路も、舊教寺院もあり乍ら、然も安南人と佛印全體の土には古調が漂つてゐる。またいろ／＼な點で風物、人情、藝術その他にあの朝鮮半

島のそれと共通するものがあるやうに思ふ。

安南風物

海防の停車場を出た河内行きのカンリンカーは音階のソ・ミ・ソの調子を出す氣持のいゝ汽笛を吹き鳴らしながら、夏の夕ぐれの水田の中を走つて行く。

海防・河内間は二時間かゝる。外側は景色が平凡な田野で他奇がないので、今日の午後はじめて印度支那の土を踏んだばかりの、何もかもが目新しく好奇心に驅られてゐる私の關心は、自然車内をぐるぐると見廻すことになる。

車は二等と三等。二等の方は大部分が佛人、男は多く半ズボンに膝子僧を出してヘルメット帽、子供もヘルメットを被せられてゐる。狗を手さげ籠に入れた妻君、赤ん坊には付き添ひの安南人の女中といった何處の植民地にも見る連中、あとは一、二人

の支那人安南人も二等の客はインテリ最上層だから洋服を着てゐた。それ等の安南人の妻君は安南服を着て三等にゐる。

三等の方をのぞくと土地の人の中に混つて口唇の厚いアフリカ黒人が體格堂々と他を壓してゐるのも佛蘭西の植民地らしいが、何より私の好奇の眼を先刻から引くのはこの印度支那東京省の土着の人安南人の風俗である。

まづ目につくのは、女はおはぐるを黒々とそめて、その黒い齒を見せたさに、大抵なるべく口もとを始終ほころばしてゐる。段々あとで氣が付いたのだが男にも齒を染めてゐるのが居る。それも老人よりも、かへつてすこし好みの古風な色男氣取りの男で二十代のやさ男ばかりか三十男の女房子のあるのもやつてゐる。百姓ではない町のホテルや住宅のボウイなどの階級だ。頭は髪の毛の長いのを途中から、白か黒の布で巻いてそれを丁度大きな釜敷のやうなぐあひに頭のまわりへぐるりと巻いて、帽子のかはりとも鬚ともなつて、顔の裝飾にしてゐる。これも男女共通である。

そして女は、大體町の中流上流階級であらうが、きつちりと細く長い手首までの袖

のついた胴の、すそは兩側のさけてゐる長い上着を前後にひらひらさせて、その下からズボンのやうな巾ひろの袴がちらほらして、素足に下駄（靴の形の木の臺に一本の鼻緒）を引いて歩く、手には菅笠の新しいのを大抵の女が「お夏清十郎」の芝居のお夏もどきに氣取りながら持つてしやなしやな歩く。

その衣裝の形と云ひ線と云ひ、明か清時代の風俗畫——、畫人仇英あたりを思ひ出さす印象である。そして彼女等が好む色彩も黒にと、き色、古代紫に卵黄。まれにおちついた古風な小さい模様柄といった、趣味としては、長い文化を持つ人間の好みの色彩ではあるが、そこに潑刺たるものとか新鮮な感覺とかの暗示は更でない、古風な過去のがればかりである。服裝の質も、絹とか人絹とか、なよなよべらべらじやらじやらした質が好まれるらしい。

面白いことには、一般の人民が、さらに佛蘭西風の風俗を取り入れないことであつた。無論、役人とか職業上とかから歐風のユニフォームや、洋服を着なければならぬ人間はのぞいて、一般の人はこの暑い期間が雨濕期である熱帯の土地で、日本人な

らすぐにもひろまりさうな例のアツパツア式と俗に云ふ簡單服やシャツにズボンといふ風な、時代にあつた服にかへてゆかないことである。

なまじ歴史を調べて何かを云ふとかへつて半可通生もの知りにならうから、いつそ素直に畫家の直感でいはして貰へば、この古風で文弱の趣きのある風俗は大體、中華で没落した宋や明や清の落人がもたらして來たものではないかと思はれる。ちやうど話に聞く北米カナダの奥では十八世紀の佛蘭西語が今でも通用語であるのと同じやうな事であらう。

そしてたつた國境ひとつの彼方の南支那廣東廣西あたりや又つい眼の先きの海南島に現在住む支那人と、その服装や風俗ばかりでなく、氣性までもが、大體元來が安南人（東京人）は同種同族でありながら何と現在その違ひの大きいことであらう。

南支那の土民は男も女も黒い薄く蠟を引いた布の短い半袴脛を出して上着も半袖、それで活潑に——殊に女が元氣で鼻張りが強くて男のやうな聲でわめいて、男女同等に働いてゐる。しなとか氣取などをやればふんとせうら笑ひさうだ。笠も竹の丈夫な

で芝居の常盤御前が雪中にかざしさうな形に立派につくつて古くすゝけて飴色になつたのを被つてゐる。中流以上は無暗にハイカラ歐米好みで、支那服でも上海邊のやうな兩側から肢のちら付くエロテイクな服よりバジヤマ式なズボンを若い女が好むといつた快活な風であつた。

此所では町の男も袖やズボンの短いのなども好かないらしい。男の中には芝



居の丹治郎の役者や、徳川時代の清元節や新内節の色男のせりふのやうな氣味のわるい聲を出す男が澤山あるには驚いた。

汽車が走り、バスや自動車を通ひ、電車もがたとあるし、見事な大きな街路樹にグキラ風な美しい佛蘭西の建築の立ち並ぶ市街、現在のハノイの人口は二十萬位であらうが、今俄に百萬大都市になつても恥かしくない町の計畫や、設備、規模の近代都市であり乍ら、河内の町、いや田舎も町もすべてに、何だか旅人の私は五六十年も以前の世の中にあるやうな心持ちがするのである。

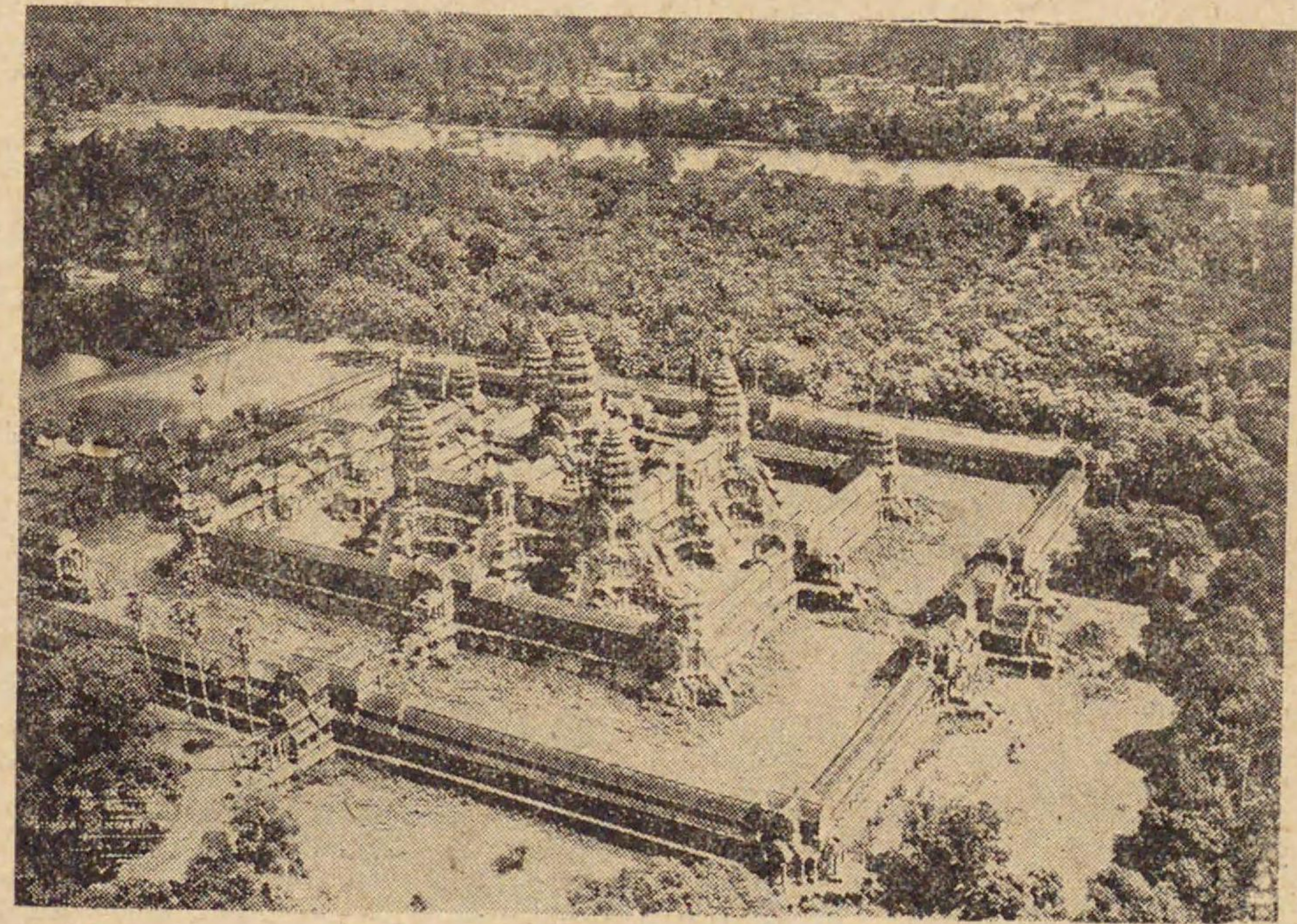
つまり佛印が五六十年、國も人も時代からおきざりを食つてゐるのであらう。蒙古へ行つて成吉思汗以後羊と一しよに草原で遊んで眠つて數百年間経つてしまつた土地と人間とを見たが、未開の野蠻の原土でないのに世の中からおきざりを食つた土地と云ふものは、現代の活躍してゐる國からくると私には何だか覺め乍ら夢をみてゐるやうな氣がする。

安南人も夢のなかのやうな暮しをしてゐるのではあるまいか。土民の生活の幸うすきか樂しきかさういつた事は此所に書くことは私は好まない。只、佛蘭西本國以外には外國を近隣の國さへ知らずに七十年ほど暮すことを餘儀なくし、安南の本來の文字は使ふことができなくなつて、安南音を佛語音にあてはめてゐるので、言葉や文字の本來の意義はわからなくなるし、あをむの饒舌にも似た土民にはむづかしいうろ覚えの佛語を使ひ、常に何物かこはさに人の顔色ばかり氣にして充分物もいはずに暮してゐる故だとも言へる。

然しすつかり文弱になり切つてしまつたとは云ひ切れない。女のやうな男が多いと見えはするが中には、生氣のたくましい安南人の兵隊も見受けるし、巴里の學校町羅典街あたりでいつの間にか世界中の人間を見知り、日本の新興を知つてゐるやうなしつかりした教養の青年もゐるのだ。

やゝ肉感的で、音無しい女達も、中々實際は働きの者で動作はひかへ目でこそあれ、南支那の女におとらず下級の女はよく働く。彼女等は働いて男を食はせるのを自慢に

してゐる位である。
然し私が河内に遊
んだ時はあいにくま
だ、歐洲開戦直前で
大敵日本が獨逸の親
友とのみ佛人が思ひ
込んでゐると云ふ間
の悪い時期であつた
ので、安南人も日本
人にうっかり近づく
と後のたゞりが怖ろ
しかったので彼等に
ついて短い旅行中に



アンコールワットの古跡

深くふれた事は、
私共は觀察以外し
るよしもなかつた
のである。
何しろ、英語萬
能の東洋にあつて
此所ばかりは英語
では手も足も出な
い。通じる言語は
佛蘭西語と安南語
ばかりである。支
那人町——商業街
の一部では南支語

がすこしは通じるかも知れない。英語は漸く一流ホテルの帳場と、ツウリストビウロ
ウの幾人かゞ通じるばかりであとはホテルのボウイでもろくに英語では用は足りな
い。

面白いことは安南人は支那人を好かないらしい。丁度蒙古人がだまされ通しに絞ら
れてばかりゐる漢人をげぢげぢのやうに嫌ふやうに、居付くと忽ち産をなして安南人
の商賣が上つたりになつてしまふ支那人、昔の朝鮮人に對したやうな態度で土人にむ
かふ支那人は安南人の内心は甚だ敏感なのだから嫌ふのも無理がない。

あの遠慮がちで音無しい安南人がシネマの暗やみではヒットラアが映し出されると
拍手喝采したといふ話も聞いた。

ところで此の印度支那と云ふ大きな半島はちやうど瓜の縞のやうに縦に大小四五本
の民族の筋があつて、此の私が旅行した東京省地方から舊都順化邊りまでが支那人系
統の安南人——これが一番多いのださうだ。それから、中心の山脈の筋の未開の山

岳山林地はラオスと云つてチベットから下つて来た野人系、半島の突端に近い西貢の港から南へかけてが交趾支那や、タイ國に續く（もとはタイ國領土の）カムボヂヤ、南に下るほど印度系になつて、全然人間の種族言語もあかの他人であるのだ。

一時極端な佛化政策がとられた時期があつて、一千年の支那系文化を持つた此の國の古い物はする分消え失せたらしいが、流石藝術にあかるい佛蘭西人だけあつて、古い城、寺其他の幾部分かは清楚な新しい佛蘭西植民地らしい空氣の中に調和よく取り残されてゐる。

それ等も大體色彩は相當派手でありながらやゝ物わびしき文弱的な印象である。

この印度支那、特殊の支那系建築物を佛語でバゴード (Pagodo) と呼んで、各地の見物個所となつて居る。私は次回再遊した場合には河内極東學院の世話によつてこれ等も見たいと思つてゐる。

南方タイ國の近くには例の有名なアンコールツットの古跡がある。この石の名彫に築き上げられた有名な廢都は、東洋北部の彫刻藝術の粹が支那山西省の大同であるとする

れば、これは東洋南部のそれに匹敵する大藝術なのである。

印
度
洋

三月の印度洋

香港を出た翌朝から船の中は一齊に夏の装ひにかはつた。

甲板には日よけの天幕が張られる。船客も船員もみんな白い衣裳になつた。食卓の中央へ陣取る大柄な英人船長の禮装も眞白づくめになつた。

十日ばかり前神戸を出る時には六甲風が身にしみて、ステイームに船客はより添ひ下級船員の印度人たちははだしで寒さうにみぢめに慄えてゐたのが、急に元氣になつて生々としてきた。

この私の乗つた船は、世界各地に散らばつて居る殖民地や屬領に居る英人達が利用する英吉利西船であつた。餘程船便の都合でもつかない場合の外は、どこの國の人

決して乗らないであらう。料理がまづくて、船賃が高くて船員が英國人かたぎで世にも横柄、おちぶれかけても氣位だけは世界中一番高い人間共だから流石お人よしで呑氣なものアメリカ人でさへも敬遠する。

こんな船もこの大東亞戦争の後にはもう東洋の海では見ることが出来なくなるであらう。この航路でも他國人は私をまぜて一、二等全部でたつた數人しか居なかつた。三等はない、無論その又以下のデッキパッセンヂアなどはめつ、そもないと云ふ英國式の氣位の高さである。

さてそんなら、さぞ上等な新式の船かと云ふと、それが又古いふるい舊式船で、會社も大きいばかりで貧乏で有名な會社だつた。如何にも老大帝國のシムボルみたような船だ。この船は其後ぢき解體して鐵材になつたといふ事を聞いた。

港々で各國の豪華船と並ぶと、落ちぶれてゐる舊家みたやうな氣がして、乗つてゐる私でさへ感無量になるやうなぼろ船であつた。

さう云ふ他人のまぢらない船だから、船中は何の遠慮も氣取りも取りのけた英國か

たぎ丸だして、アイルランド人さへ他國もの扱かひの繼子で、屬領の土着人の船客たちも又その以下に扱かはれてゐる。

私はこの船中で暮した三十餘日間に、かへつて歐洲本土よりも餘計にあとになつては知り難い、いろいろな英國人の特質や特性を知る事が出来た。

船の下級船員は大部分印度人ばかりである。

印度人船員はお客の外に更にまた英人の同僚に奉仕しなければならない。

船客の食事がすむと今度は二等食堂では、客と一しよに食べる高級船員でない、給仕長や給仕や女中たちの宴會が始まつて、おなじ仲間の印度人たちはもう一べんづゝ給仕のやり直しをやらされる。

食卓ばかりではない、萬事こゝにいふ具合に印度人は二重の奉仕をさせられてゐる。

印度人たちは皆やせて居た。あの上海名物の印度巡查や、南洋の各地で店を開いてゐる富んだアラビヤ夜話に出てきさうな肥えた印度人たちではなかつた。

英人船客の話によると、印度人は因習如何とも度し難く、肺結核が非常に多いといつてゐるが、因習をわざと尊重させてやるのは愚民政策と亡國政策の遠大なおそろしい計畫だと思つた。

印度人船員たちは英國船員のやうにピフテキは喰べないで、彼等は彼等で別にライスカレーをつくり、へんな印度風のパンを焼いて、ごく低い生活をしてゐる。印度人船員たちは従順で、船乗らしくない。我々と口を利く給仕たちとか床屋さん等は皆蟲の鳴くやうなちいさな氣の弱さうな聲を出す。

時々、細かい品物がよく紛失すると英人たちは口小言をゐつて居た。

シンガポールに着くと、船客仲間のこの邊の旅になれた老人が、此所を見物に出かけるなら、必ず五分以上は太陽の直射の下にゐてはいけない。日傘をさすか、何かの影に立つことを忘れるなど注意してくれた。あとで日射病になるからださうだ。

成程船窓から見ると、荷役にやつて來たマレー人たちも、灼けて火のやうにありついにちがひない舗装道路を平氣ではだして歩いてゐる癖に、先づ彼等は手近にあり

合せるアムベラか何かで自分の入る日影をこしらへて、その影へ入つてきて仕事にかゝり出す。

シンガポールの町そのものは、大都市の香港や上海などとは比べものにならない、殖民地風の平たい木造のバンガロウ式の家並もまじる細長い市街であつた。地勢も景色も平凡で、マライ半島の突端のちぎれた小島のことだから、丘陵もひくく、そびへ立つほどの山々もない。

夕方には船で知り合ひの英國人經營の女學校寄宿舎へ夕食に招かれて行つた。貯水池のある郊外の公園をドライブして、その夕方はスコールのあとの涼しい一時になつた。

マライ人や印度人の上流の娘たちを教育する寄宿舎で、二十人たらずのさういつた年頃の娘たちから私は、口數のすくない然し無限の敬愛を日本人に對してよせてゐる表情をくみとつた。

庭の廣い木造のバンガロウの建物はスコールのあとの木の葉が燈りに輝やいて、本

當に南洋の心もちのよい夜になった。

回教徒特有のあの土耳其帽を被つた運轉手の車で、シンガポールの如何にも遠い殖民地らしい、香港や上海の氣ぜはしい都會にくらべるとずつとのんびりとして居る夜の町を、南國氣分を味はひ乍ら船着場の暗い船體へ戻つてゆくと、遠いひとり旅のゆくてをしみじみと感ずる。

船は此處へ二三日碇泊してゴムを船腹へ一ぱい積み込んで出帆した。然しすぐ又ペナンの港へ寄つて又一、二泊してさてマラッカ海峡から印度洋へと乗り出した。

印度洋のなぎといふものは、暑くて、無爲でつらいものである。

西側の印度大陸側へは船になれた人は船室を取らない。私はすなはち不馴れだからこの午後の太陽が春の日で長く照り付ける、まるで料理ストオブの中で蒸焼にされるかと思ふやうな鐵板の灼ける側のベットに晝寝する苦しさをしみじみ今に至るまで忘れない。おもへば、マライ半島あたりを鐵板の戦車のせまい中に戦ふ將兵の勞苦

はどんなであらう。

ズツクの水槽で水泳が盛んになる。風呂場のシャワーも大繁昌になる。

食卓では、一同の食慾がへつて水ばかりおかはりをする。今まで毎回ビフテキの大きなのを二ツづ、平らげた英國人の若い男は、今度は一度にアイスクリームを五ツづゝ食べ出した。『もう一つ』といふ聲もきゝなれてだれも笑はなくなつた。彼等はそれからには献立書きの内から、自分の體に必要なものを二つ三つ位撰んで、自身の適當な献立をつくつてそれ以外にむやみと食べて見はしない。日本船客の中には十幾通りくらゐある献立の八、九割の品數を註文する人が居るがあれはやらない。

丁度夕食がすんだ頃の印度洋の夕なぎはさざ波さへも消えてしまつて、大洋の水が一めんに平たいガラス板のようになつてしまふ。海といふと波が大きくもちいさくも立つてゐるものと思ひ込んでゐる人間の想像の外である。

この奇異な波のない大洋の平らな水の面は、海の藍は消えてしまつて、本當に鏡のやうに又ガラス繪のやうに空の碧さも、白雲も、夕やけの五彩のいろも、かたちもみ

んな其の儘海の面へさかしまにはつきりと描き出される。
あつさに頭腦のつかれた船上の人々は、この五彩の天地の間に、たつた一隻きりの船に乗つて漂よつて居ると、何とも知れず夢幻的な心持ちにひき込まれてゆくのである。

南支那・海南島

南^{なん}粵^{えつ}四趣

一、粵東勞婦

汕頭附近は粵東と呼ばれる。粵の國は南の兩廣から此の邊までをとなへてゐるので、それから北はむかしの閩越で、粵と越の區別も撰索したらむづかしいのであらうが、あの厦門はもうその閩越の部分になる。



おなじ南支那といつても福建つまり閩越の人間とこの南粵人とはかうもちがふかと思ふ。福建人の性格は中支那の人々にちかく、南粵人は火のでるやうな人間だ。

汕頭でも廣東でも、朝の日ざしがまだやや和やかに、並木の大きな樟樹の影がつめたい時分に舗装道路をはだして、この晝にあるやうな御連中が近在から町の人の集る辻々をめざしてせつせとやつて来る。

市女笠、綾葦笠、そんな上等なものではないが格形は殆んどそれ等とおなじやうな笠、中には昔の大きな雨洋傘のやうなのを粵人特有の小柄な體へいただいている菌のお化みたやうなものもある。ハイカラな事が大好きな南支那人がむやみと歐風化した、ややカリカチュアじみる近代都市の中心へ、このはだしの古風な群は怖れ氣もなくわつと押しよせる。

それから今度はその幾人かは必ず、辻々で女だてらに喧嘩口論をおつばじめる。

見物がふえる程、大聲でわめく、身ぶり手振鼻の穴を得意さうにおつびろげるが、さて顔面神経にはそんなに忿怒の相は出てゐない。

それを男どもはあごをなでてにやりにやりとながめてゐる。然してこの働きものじやじや馬連の亭主たちは仕方がないから、元氣のいいのは海外へ華僑とふん發し、落伍者は女房の尻にしかれてサイコロをもてあそぶ。

二、浮粟泉

(海南島 瓊州東坡書院)

小門のわきの左手の石段の下にはひとつの浅い大きな井戸があつた。

ちやうど鎌倉のあちこちにある名泉「何とかの井戸」によく似ている。宋文化には同じ感情がある。この井戸は浮粟泉と云ふが蘇東坡のゆかりの井戸はこの庭の内外にこれともうひとつあつた。由來記はつい讀まなかつたがあれのゼイタクな東坡もこの島ではついに食べ物に乏しくて天をあほいで溜め息でもしたら粟が湧きいでて詩人を養つたといふやうなことにちがひない。

此の閑居のあとは山ひとつ、溪ひとつない海南島北部の平野の古都のはづれ、平凡な八重むぐらの丘の小苑だが、さすがに此所だけには、今も蠻地海南島ただひとつの

文雅の氣が残る。もし芭蕉翁が此所へ來たら、酒一壺盃をへて、くさぐさの菓子を盛つた籠一重を贈つてもらつてきつとひとりを楽しみ乍ら、幾日かすす氣になるであらう。

此所で作つた東坡の詩には凄絶ないものがある。

但し、その詩は本物だが、石刷の書はひどいニセものである。

『清夜無塵月色如銀酒斟時須滿十分浮名浮利休苦勞神似隙中駒石中火夢中身錐抱文章開口誰親且陶陶樂取天真幾時、歸去玄作箇閑人背一張琴一壺酒一溪雲九十日春都過了貧忙何處追游三分春色一分愁雨翻榆莢陣風轉柳花毬——』

三、廣東の屋根

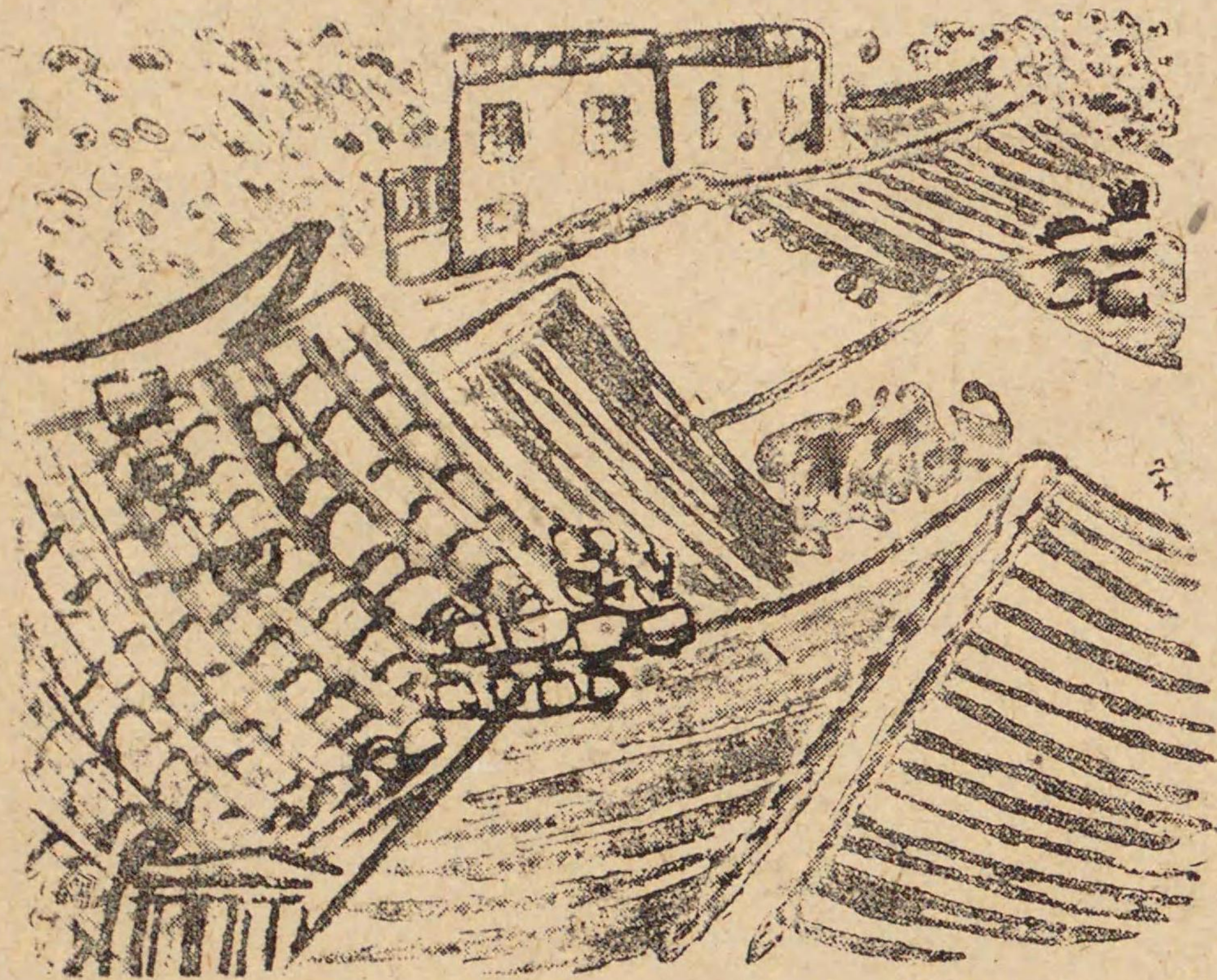
支那の瓦は内地のお菓子の瓦煎餅そつくりの形状大きさを今だに保つてゐる。

日本の屋根瓦、ひつかけ、棧の銀みがきの大きな丈夫なのを見てゐては、この食べる瓦せんべいは瓦の想像に遠い。

支那では古風な面白い瓦を、丁度菓子折につめたせんべいのやうに、びつしり行儀よく並べて屋根が出来あがる、天井板のない下からのぞくと、下葺はなくてぢかに瓦がせんべいのように並んでゐる。

ハイカラの好きな廣東も珠江岸の大建築や、新生活の金もちの家の外は、この屋根がびつしり隙間もなく立ち並んでゐる様子は、唐朝の李白の『長安一片の月——』の詩の時代とあまりはかばりない。

然し南支那は流石に庶民に至るま



で派手ごのみで、この屋根が黄河のへりの都城ならば只灰色の波のやうにつつましく行儀よく並んでゐるだけなのだ、此所ではそのもろきせん餅瓦の上へ板を渡して、シャボテンやら何やかや熱國の色彩のつよいとりどりの植木鉢が並べてある。

三、廣東むすめ

小麦いろの肌、きびきびした動作、年ごろの娘のことだから、バアマネントをかけたり、髪をねぢり巻き毛にしたり、前髪を切つて下げたりおしやれをやらないわけではないが、大體に支那中の娘たちのなかでいちばんさつぱりと明朝である。

着物もしやれた洋装も支那服もきるけれども又、彼のちやちや馬勞婦や、男と同じ黒無地へ蠟を引いたのや淺黄木綿のにいやと同じ布同じ型をさつぱりと着こんで平氣である。

あの他國人には獵奇的に見える長い上着の兩脇を深く切り上げてノウ・ストッキングのエロテイクな姿の支那娘より、昔なら下婢か兒童のみがやる長袴を歐米風な新味

を入れて、バジャマにズボンのやうにしてさつそうと歩いてゆく。

但しその聲は年たけてはいづれぢやぢや馬女史になる娘たちのことだから、あの北支娘の羊のなくやうなのとはおよそちがふわめき聲を出す。にやけた男はけ飛しかねないありさま。

澳門行

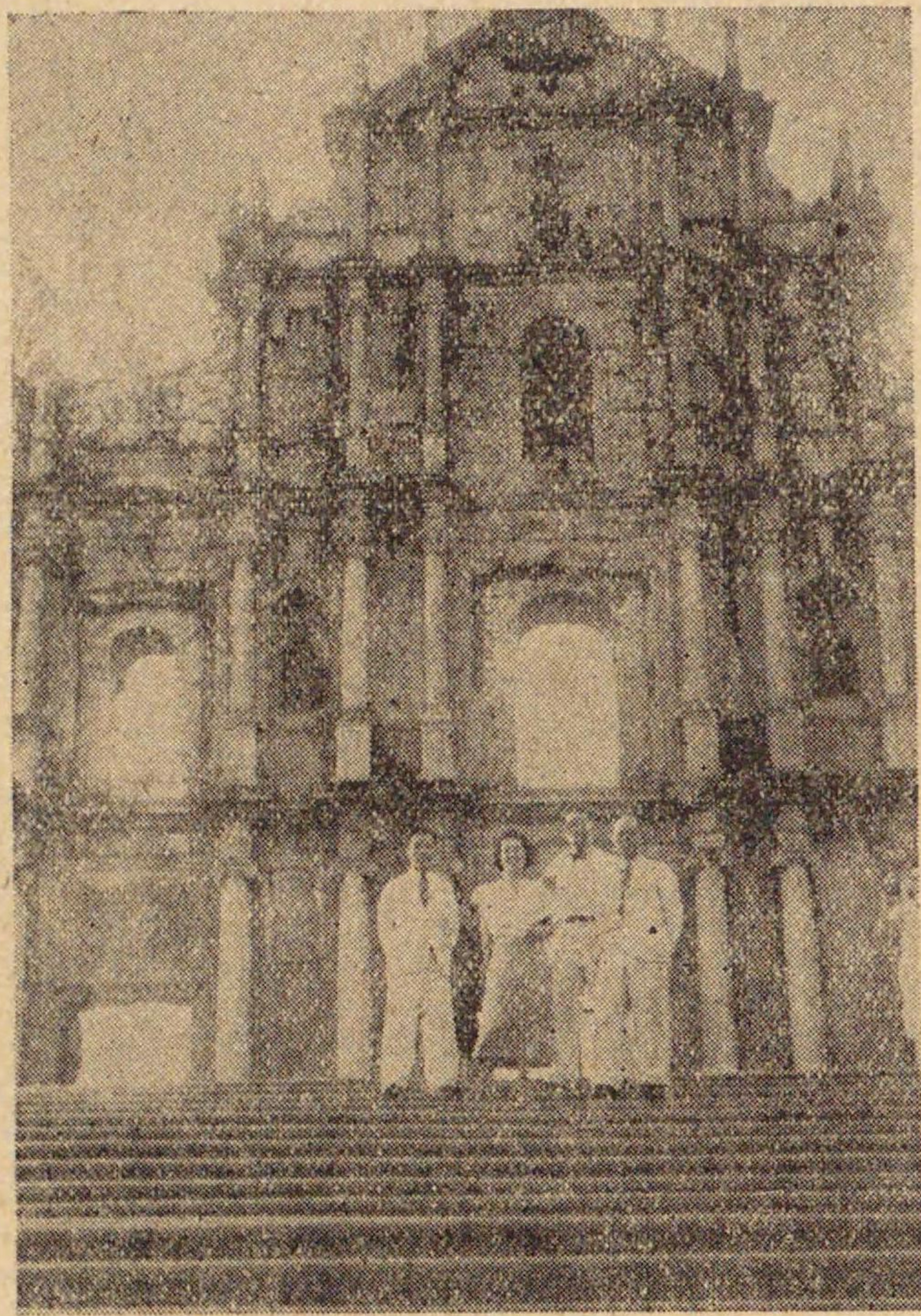
廣東の珠江にかけられた、たつた一つの橋の海珠橋の上手、小さな租界島沙面に近い海岸から一日をき位に澳門行の汽船が出る。

日本の瀬戸内で淡路がよひをやつてゐた銀白色の美しい船だった。それがこの珠江の濁つた河水にうかんで、まわりにまるで舟蟲のやうにうす汚れた蛋民の住む小舟がびつしりこの船をとりまいてごやごちやもやつてゐるのは、塵芥の中にきれいな白鳥がゐるやうに見える。

十餘年前の香港を私はみたりなので、この頃の香港もちよつと視察したいと思ふと、厄介なことに英國側では、當時廣東から香港へ直接の航行は月二回しか許さな

つた。

いや或は日本の側から沙面在住の歐米居留民の爲に月二回、食糧其他のために香港との交通を許可してゐたのかも知れないが、とも角半月待つわけにも行かないから澳門へ行つて、其所から香港かよひの



澳門のカテドラル跡にて

べき風物らしいのは、その前に海南島への往復で沖合から眺めて感じてゐたのであつた。

船へ乗りかへてゆくのである。その澳門がちよつと畫家にとつては親しむ

ちやうどそれは何だか地中海のどこぞから南歐の小さな港をながめてゐるのとそつくりであつた。それにあの邊はもう珠江の水で海もにごされてゐないし、亞熱帯の空氣、イギリス臭くないたすまひ、どこカラテン系はちがつてゐる。

香港は何から何まで藝術家の血のない冷血のアングロサクソンのいとなみだから、私を喜ばすべきものは、先年だつて今日だつて何もありません。あれよりはきつとちつとはましであらう。

さて夏の朝陽をあびて船は海珠橋の下はくぐれないから、上手へまわつてもひとつ先きの珠江の他の河すじを下つて、バナナと荔枝の並木を兩側に見乍ら下航する。黃浦、虎門から先きはもう海になる。

四時間餘かかつて、澳門へ着いた。すぐ丘の向ひの他の船着き場から香港がよひへすぐ手續きがうまく濟んで乗ればまた三四時間でもう夜は香港へ上陸できる。

私は澳門を見物したので、此所に一泊ときめた。日本の商家が二三軒あつた。日本の陶器雜貨などを賣る店だが、日本人が行けば案内だの世話だのもやいてくれ

る。

陶器商の吉井さんと云ふ人がちやうど船へだれかの出迎ひに来てゐたので、私もいつとはなし外地にある時の日本人同士、一しよにその店まで行つて、夫からホテルをきめた。

ホテルの前の海岸には歐州風な大きな並木の影があつた。惜しいことにはその又前が埋め立てられて雜草の空地になつて、戦争で逃げこんだ支那の子供のボウイスクウトや、大人の支那人がごちやごちやゐる。山の上にもいいホテルがあるさうだ。私は出入りの便から古めかしい、西洋のわびしき古都にありさうな落ちついた、この並木の前のそれでも震災前の横濱のグランドホテルぐらいな宿をきめて、冷めたい飲物など飲んで陶器屋の吉井さんや、廣東の報導部の某氏などとロビーで話してゐると丁度三菱の香港支店長の本田さんとも知り合ひになつて旅は道づれ、皆一しよに澳門めぐりといふと大きい猫の額のやうなちいさな港、はしからはしまでドライブして十キロか廿キロ米のところである。

此所の支配者のポルトガル人は僅か數千人でもやつぱりひなびても南歐の匂ひがして快よい。但し町をゆく人は殆ど混血人、東洋で生れてあちこちをうろついでゐるやうな歐州人が少々と、あとは戦争から足の踏場もないほど支那人がつめこんでゐる。然しこの避難民は土地でもありがためいわくでもある。日本の宣撫で段々に、在所へかへつてゆくと、此所に居るのよりもすこし抗日性の香港へ逃げた支那人の一部が又此所へやつて来る。それからそれが段々感情が變化して皇軍の治下のもとに在所へかへる氣になるといふ段取らしい。

港としては香港の方がずつと澳門より優秀なのは論じるまでもないが、香港ほど、海も深からず、山も高からず港も大をなし得ず、のんびりとした土地のただすまひである。

私の宿つた古風なホテルあたりを界にしてむかしの澳門は繁榮したのであらう。道もせまく、西洋の田舎港らしいのは、あの廈門の鼓浪嶼に似てゐる。しかし鼓浪嶼よりはそれでもずつと大きい規模だ。

然し昔その儘でもおけないと見えて現在はホテルの先きから岬になつてゐる突端、それが内港、ほんとうの澳門のにぎやかなごちやごちやした港になる入り口の岬の方面へ新しい道路や、官邸官舎其他新設備が出来つつある。

町の中央の公園には、バスコ・ダ・ガマの記念像があつた。久しぶりでバスコ・ダ・ガマなる名をおもひ出したものである。小さい可愛い公園だ。

むかしの澳門の中心部、一番海から目立つ丘の上へのぼる立派な石段があつて、正面にカテドラルの前面だけが立つてゐる。

町その他から來て一番目につくところに寺院を建立するのは歐人の都市をつくる裝飾のまづ第一の仕事である。

この堂々とした石階と寺院の前部だけあつて、後は焼けたのか、建立されなかつた事はまづあるまいと思ふが、歴史は吉井氏もよく知らないらしい。然しこの寺院の前部の石彫、石建築、すべて日本人の手になつたものであると云ふ。多分徳川の初期の天主教徒の石工たちであらう。たしかにその手法である。

藝術的には大したものでもなくとも、古拙ですつかり歐洲風にやつてある聖母や聖人の石彫、私は長崎邊の天主堂などを知らないが、此所のこのカテドラルのフアサアドも誠に古拙で何となく親しめる。

寫眞はここで撮したものだ。

町はづれはすぐ國境、黑人兵と葡人の兵が居た。

さて夜になつてせまい繁華の辻を見物に出かけると、これは例の有名なさいころ場、モナコのやうな一個所の莊麗ではなく、大小のそれに支那人が國の興亡をも忘れて、血眼になつておしひしめいてゐる。人混み喧騒、辻々の食物の露店、南國のおびただしいさまざまの果實、脂粉、惡臭、南歐の夜の放縱な空氣が、支那の無秩序と不潔のなかに一しよくたになつてゐた。

廣東デルタ地帯

廣東から東の方面、東江下流々城や增城縣あたりの前線をめぐつてかへつて來た私は、ある山寺の一夜であやしき掛布團から傳染した水蟲でしばらくの間なやんでゐた。

すこしその両手の水蟲の惱みが小康の體になつた時、今度はデルタ地帯の方へ出ることにした。

デルタ地帯と呼ばれてゐるのは廣東の珠江の上流、三水といふ所で中支方面からくる北江と廣西から來る西江が一度合流して又左右へ別れるあたりが三角形の頂點で、その三角形は半びらきの扇のやうに海まで擴がつてゐる。

といへば簡単だがその扇のやうな地帯の中には東に珠江と西は西江とで區切られてゐるばかりではない、まだいく筋も縦にも横にも大きな巾の河が交錯してゐて、海から又は隣りの河から河へと舟であちこちデルタ地帯の町々へ行くのは比較的自由だが陸地つづきだと、橋を渡り、江を横切りデルタ地帯の端から端へ、つまり廣東あたりから、今この私の行く先の江門や新會までたどりつくのは中々の面倒である。

デルタ地帯といつても、島國の我々の急流の河川の裾が、簡単に泥でうまつて洲になつてやがて人のすむ陸地になるあの芦などの生へた平べつたい土地とは違ふ。

専門家に、一度この地帯の委しい地質學的説明でも聞かせて貰つたら現地をみた者には更に興味が深いことであらう。

南支那のあの邊は御承知の通り海まで山がせまつて、海中にも大小の島が澤山ある。さういふ場所のデルタ地帯であるから、我々のちいさき隅田川や淀川の川尻の干上つた洲とはちがつて、デルタといへども、峨々とした小山脈もあり、瀧のかかる山もあちこちにあり、小山や小丘はどの洲の上にもものつかつてゐて、一望はるけき平洲

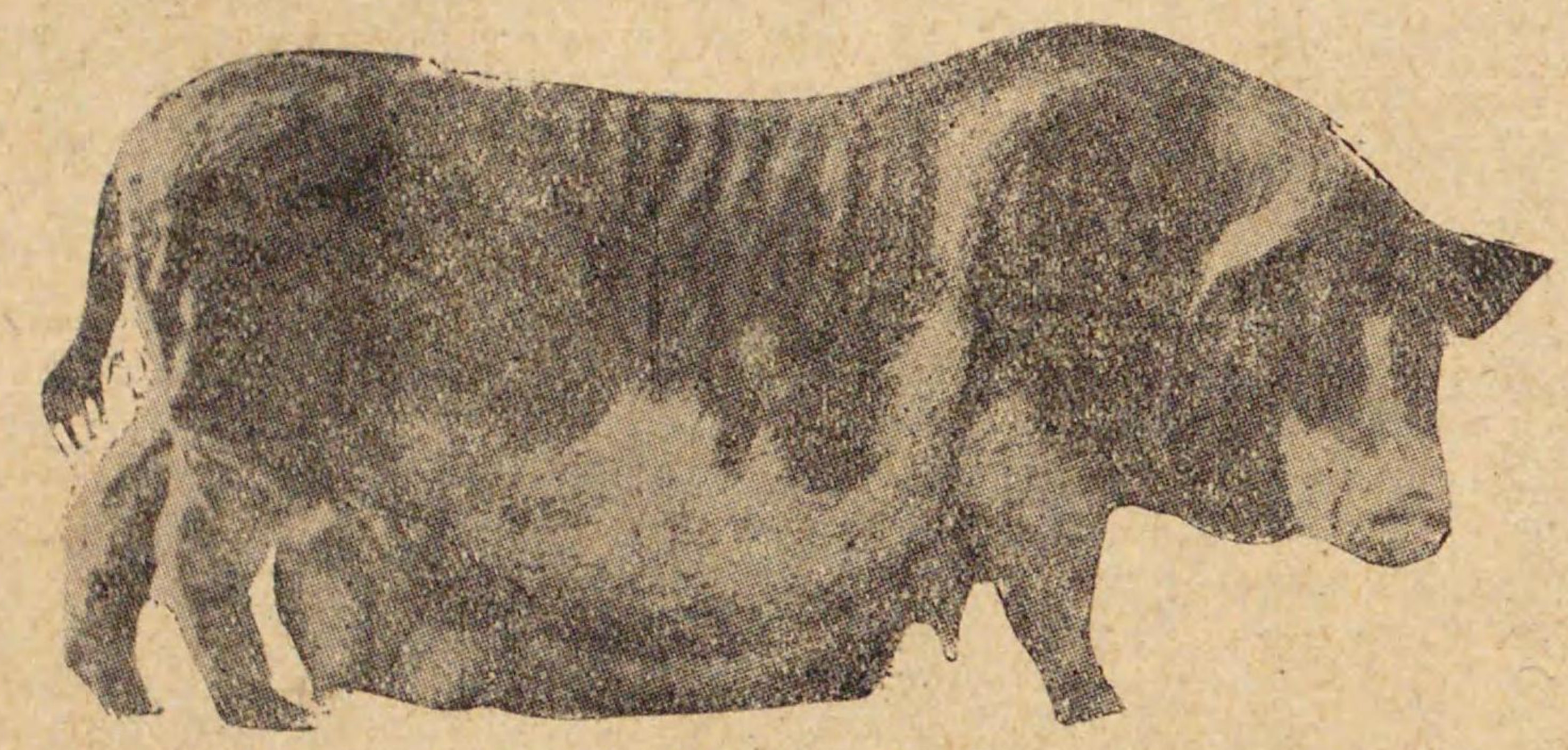
の場所など一個所もない。

さて或朝早く廣東の沙面よりも上手の粵漢線停車場附近の渡船場から對岸へ渡つて、先づそこから小さな汽車へ乗る。

廣東の珠江にはあの海珠橋が存在するけれど、あの橋は廣東の中洲の市街へ通じるだけで、その先きにはもう一と筋河が流れて、對岸へは渡れない。

この汽車は例の三水まで行くのだが、途中の佛山で汽車を下りて、二筋三筋の河川を越えて、その先きを流れてゐる西江の右岸の九江市まで行く。その途中でも北江の支流などは中々の大河である。それには工兵隊の造つた橋が出来てゐた。

佛山は清朝時代のこの地方の政治の一つのポイント



南支の巨豚

トであつて、清朝と共に没落した階級の人々が、今もつて住む町なのだ。故に書畫とか骨董とか南支で有名な例の端溪の良い古硯なんぞがこの町から今もつて入手できるさうだ。その名石端溪の硯であるが、成程廣東へきてから數はずい分見たが、北京で出くはすやうな名品は、ゆきすりの旅人の私には一つも見當らなかつた。つまり石の最上部分は帝王の地へ持ち去られて、端だの肉でいへば皮だの脚だのといふ安いとこるが、たとへ富んでゐても商業の町にすぎない廣東へ残ることになつたのであらう。

閑話休題、佛山より九江の町の方が風物ではすぐれてゐた。もつとも佛山はその當時コレラが大流行で百名も支那人が倒れたので、町の出口でも入り口でも自動車を下りて頭の先きから足の先きまで消毒薬をかけて貰つてほうほうの體で、止む方もなく通りすぎたのであつた。

九江の町は遠く近く、山あり河ありといふ風光明媚の地で、華僑の住宅や別荘などの小ぢんまりとした五階三階建の家も相當ある。

南支には新生活運動がよく浸潤してゐるので、マラリヤの蚊は高い所へは來ない

し、通風によくといふので、田舎の小さな町村でも五階や三階の洋風家屋をよく見かける。かういふ家は便所も水洗であるので、我々は大に助かる。

部隊本部でお晝を御馳走になつてから、家の露臺へ出ると、四周の風物がよく見える。遠く近くの高からずひくからずといふ山々、田、畑、川向ふのあの山には瀧があつて、寺があつて中々いいと云ふ話。市街といつても二た筋かそこらの町なみで、ついそこの大きな樹には鶴がよく來るといふ話。山と川のあなたの廣東の方角も、上流の三水の方面もまたこれから行かうとする江門や新會の方も、晴れたり曇つたりして、長閑な南支の初夏の日であつた。町の中といへども木々は青く奇鳥の聲も近い。

隊長室で書畫を見たり、二つ三つある端溪の硯をひねつたり、支那人が持つて來た、茉莉花やその他の花をとり合せてつくつたよい匂ひの小さな花束、この地方の人々は毎朝新しくこれをつくつて手元へ飾つてたのしむらしい。——まことに戦時の旅を忘れて、嬉しいものであるけれど、これから更に西江を下つてゆく手はまだ中々遠いので、惜しくもここをやがて出かけねばならなかつた。

九江の町からしばらく行つて西江の岸へ出ればもう閑目ではない。河の向ひでは兵匪が放火したのか草屋が燃えさかつてゐる。

わが××艦が一隻、遠く海から溯つて来て砲口も敵にむかつていかめしい。

ここから××船の荷物の上へ腰をかけて二時間ばかりも兵隊さんと一しよに西江を下つてゆくのだ。

西江は南支第一の大江で、この邊の中はちやうど南京下流鎮江あたりの楊子江ぐらゐある。水量は雨期のせいでもあるが、とうとうと流れてゆく豊かさは楊子江よりまさつてゐる。水も支那の事ゆゑ濁つてはゐるが、楊子江よりも又つい同じ流れの珠江よりも濁りが氣のセイか浅いやうに思はれる。

私の貧弱な支那旅行の見聞では、大河であり乍らあの杭州の錢塘江だけは水が蒼く澄んでゐた。

兩岸はひくい山や丘、右岸のその後の方にはもすこし高い峯がつづく。その間を河

べりには田畑がある。森や竹やぶ、荔枝の古株の並木やバナナ畑といふ、絶景でもないが親しむべき風景である。

陸つづきだと思ふとそれが島であつたりするのは、ちよつと瀬戸内海の島のやうなぐあひだ。

河幅は心もちづつ擴がつて行く。二時間ばかり下るとやがて右岸に白亞の洋館やアメリカ石油の倉庫などのあるハイカラな洋風部落が出てくる。これが江門で、デルタ地帯の要衝であつた。ハイカラな白亞の建物は税關である。この邊は海からや、又珠江下流の虎門あたりから船で來る方が便利なのである。

脱關の横手の運河を入つて、淀んだ水には紫いろの水草の花が澤山浮き、竹やぶや、蛋民の住んでゐる船などが碇泊してゐる親しみのある水上を通つて行くと、すぐ江門の市街になる。これも中へ入れば支那の不潔があるが、外見では四階五階の家が數町の間建ちならぶ新都市である。

この新生活都市にくらべて、もう四五キロ前方にある新會縣城は舊支那の町であつ

た。江門が物質萬能の商業地に比べて新會は古風な矛盾と因習も混るが、やや文教の香も豊かだ。江門から新會へかけての裏山は相當に高い。一番高い所は千米突ちかくもあらうか、いい景色らしいので、半日がかりで登った。

山腹にお寺があつて、途中の瀧は有名なものらしく、平時は附近の人々の遊散場だ。後ろに峯を背つて、木立に見えがくれするこの山寺は遠くからのぞめば中々いいが、登つて見れば、建物も瀧もみなつまらないものばかり。溪の向ふの横手の峰には古い大きな石人や石獸があつてこれには何だかしきりに心をひかれた。

その山寺から更に勇を越して絶頂まで登ると江門、新會は眼の下に見え、此山の後にも又ひとつ西江の支流が流れて、新會の先きをめぐつて海の方へ向ふ。もう此所からは海も三四十キロ米ぐらいの筈で、それとおぼしき邊りには、ひくけれど重なりあふ山かげに曇り目に漠湖として海らしき光る面が見えたが、それも或はデルタ地帯の私の知らない河のひとつであつたかも知れない。

再 會

まだ初夏ではあつたけれど、南支那のことだからもう物すごい暑さだった。

その上に南支那は夏が雨期で、日本の梅雨のやうに一ヶ月なら一ヶ月たてつゞけに降り続いてあとがからりと旱天になるのは違つてどうも雨期といふのは夏の間何ヶ月かぼつくとつゞくものらしい。

だから梅雨ばれのむし暑さとかびだらけを夏中繰りかへしては、人間も品物も蒸れて行くのでマラリヤ蚊はへらない。水蟲は手足の上で、治りかゝつたりまたふえたり、食べ物はかびが付くか蟻がたかるか、異國人にとっては正に瘴煙蠻雨の土地であつた。

廣東の町から後の小山となり山とつづきだんだん山脈が重なつて行つて、さらに奥には雨雲に掩はれたかさなりあふ高い山が現れたり、かくれたりする。羅浮神仙のあの傳説のそれだと思ふ羅浮山もその山の内のまだ平野にちかいところにある。

低い山々は小松なんぞに掩はれて、せまい溪間には青田が、溪流にそうて續く、廣東附近の奥まつたあるところに警備をしてゐられたのは、この關西方面の將兵であつた。もう一昨年のことである。

春の末からこのむしあつい軍旅を二ヶ月ぐらゐつゞけた私は、どこかで背負こんだ水蟲の手がしつかきのやうになつたのがすつかり直つたので、また廣東から寫生用の道具を持つてその方面へ行くトラックのはしの方へ積んで貰つた。そのぼんは夕やみにまたどしやぶりのゑらい雷雨にあひなから、廣東攻略戦では忘れられない大平場といふところへ一泊した。

その翌日、更に便宜があつて前へ進んだが、日中最前線のある小山のふもとの隊までゆくと前夜の睡眠不足と、空腹に早朝からあつちこつちでいづれも歓迎にとつとき

のサイダアをふん發してすすめてくれるので人情としてどうしても半分ぐらゐるのむ。それと暑さ、到々まるつてしまつて、倒れさうになつて來た。本當の病氣になつては手敷をかけてすまないから、一とねむりしたら一番よからうと、隊長に御願ひして空部屋を拜借して二時間ばかり、クレオソート丸を三つばかり口にほうり込んで、さてぐつすりと寝た。

濕地の山間、無論晝とて蚊は容赦なくぶんぶんいはずに食ひに來る。すると、當番兵がやつて來て部屋の一隅の紐を引つぱると、する／＼と器用に蚊帳が部屋の隅からすべり出して、私を快よく被うてくれた。

根が丈夫なので、これでもうさつぱりして、コレラも赤痢も日射病の怖れもみんな霧散、それから部屋を出てあたりを見ると、どうも中々氣がきいた陣中のしつらへである。

まづ入口には至るところに生えてゐる南支名物の大竹で編んだ青すだれのついたてが出来てすすしげに立てられ、軒先には青へうたんもぶら下つて何だか風鈴の音でも

おもひ出す。

前を流れる濁った雨期の溪水をこして汲み上げたのが青竹のかけ樋から風呂へそぐ。パイナップルの盆栽、山蘭の鉢植、應召の將兵たちが夏の家居の愉しみを手まめにしておかして再現して瘴烟蠻雨の遠地の戦の閑をなくさめてゐるのだつた。

いつたい皇軍將兵はみんな風流のところがあつて北、中支いづれの所を問はず、こし軍の行動にゆとりができて滞陣すると一番ぶしよな人でも必ず壁に畫や寫眞、何かの入れものへは花を挿す。もしもすこし時間があればそれ／＼工夫をして、壁を張つたり、柵をこさへたり家の横腹をくり抜いて出口を付けたり、必ずやるのだけれど、關西といふ土地柄かこゝの兵隊さんのは一と際その巧みさが目についた。

さてその翌日、こゝの將兵に別れて後、私が海南島から戻つて來ると、もうその部隊はある方面の攻略に出動して戦争をしてゐた。

それからちやうど一ヶ年経つた。また中支那をめぐつた私は南下して厦門から汕頭方面へちよつと立寄ると、この懐しの去年の山間の部隊はそつくりその附近に來てを

られることが過然に耳に入つた。

私は午後の船の出帆の時間までをくり合せて、自動車でその部隊へ飛んで行つた。やつぱり暑い暑い日だつた。けれどもあの山間のかびと濕氣の前線から比べると、これは大きな立派な部隊本部で、遠くない海からはさはやかに風も吹いてこようし、廣々として立派すぎて、もう青べうたんや竹のかけ樋の水の風流はなかつた、去年、口などは無論さく時間もなかつた、この部屋の兵隊さんで多分あの時の私の姿だけちらりと見たくらゐの人までがもう隊の入口から聲をあげて懐しさうにして下さる。

隊長はいよ／＼元氣で、武勳がかさなつたからこのなつかしい再會に人々のうはさ、おもひ出と、話はずきない、けれどもいよ／＼陽にやけて服が古びて白髪がすこし殖えてゐられた。

中
支
那



中支那の 味の名物

南京で外交部長の褚民誼さんの私邸で話をしてゐる卓の上に、あの支那の彩色畫によく描かれるまん圓い橙色の枇杷が盛つてあるお皿が出てゐる。

つい近所の無錫の附近から出る名物ださうでひとつ摘んでみると褚民誼さんが佛人はだしのうまいフランス語でいふ。氏も私も先方の言葉をお互ひに知らないのかういふ他の國の言葉で用をたしてゐるのだ。

早速私が手をのばして常識によつて先づ中で一番大きい粒を拾ひ出すと、褚民誼さんは笑ひながらこの實はちいさく締つてゐるはうが味がよりいゝのだと自分で撰り出して呉れる。

皮をむくと外皮の美しい橙色とはちがふ、ごくほんのりと黄ばんだ白い果肉で、味は成ほど御自慢どほりしまつて大變にうまい。丁度そのころ支那の各都市へ出廻つてゐた内地の茂木枇杷は、これよりすつと改良されてゐるから、肉が豊富で食べ手のあつるのはよいけれど、甘酸の妙味がより少くより水っぽい。もしこの圓枇杷を内地式に工夫改良したら天下一品の素晴らしい枇杷ができさうだ。

褚民誼さんには食事にも招かれたが、この人の家庭料理は支那料理ながら、やゝフランス風に簡素化されてゐた。口當りもよかつた、世上支那料理を天下の珍味といひ、榮養物といふ人があるが私はあれは時代おくれの複雑だと思ふ。汽車も飛行機も冷蔵庫もない時代の巧緻さであの新鮮なものから得られるエネルギーの少いのが大きな缺點だと思ふ。生は葱とか蒜とかくさいものばかりで、あのセロリやサラダやトマト、また日本の新鮮な刺身なんぞやピフテキのなまものゝ強いエネルギーが身體に攝れない。みんなどろどろ、ぐちやぐちや煮込んでしまふ。尤も支那ではこの天地水にはびこる不潔を先づ如何にかしなければ、揚子江の生のお魚や畑の野菜をそのまゝ

かじつたら忽ち病院行きになる。

現江蘇省主席の高冠吾氏の家でも食事を招かれたが、この人は壯年ながらお茶の通でいろいろよい茶を貯へてゐるとかで有名で、安徽の「鐵觀音」といへば人も知る名代のお茶がまづ出た。

その淹れ方は日本の玉露を淹れるのと同じやり方で、味は玉露より口あたりがすつとかかるく色は浅い緑であつた。煎茶式でおなじみのあの小さなお猪口のやうな茶碗へ注いで出される。

安徽の「鐵觀音」は福建の「鐵羅漢」とならび稱せられる銘茶、どつちがいのかは安徽の衆と福建人とでおのおのれの方が支那第一なのだといつて降らない。比べて味はつて好き嫌ひをきめる方が早手まはした。

この「鐵羅漢」の方は厦門のお茶を賣る店で試みた。店の小僧が例の小さな煎茶風呂へ炭を起して小さな藥罐をかけて湯を沸かし、チヂミのシャツに半股引の手代がそれでもちやんと見てゐる前で朱泥の急須へ煎れて、おのおのへ注いで出す。案内の市

の商務會の主席が味はつて何やらちいばあ、帳場に頑固な顔をして納まつてゐる親爺と話をする。この方は安徽の茶より色は紅茶にちかい色であつた。その商務會の主席や茶莊の親爺が鼻をうごめかす通り、手代の手なれた淹れ方とで、味も香も上々だつた。やつぱり日本の玉露よりすつとかるい。

この兩銘茶はほんたうの茶の葉一點ばりである。私の乏しい支那茶の知識では今まで高價な支那茶といへば例の芳ばしい花を交へた包種茶で、たとへば茉莉花だとか蘭だとかさういふ花の香の風趣を添へたのばかりを珍重してゐた。

きゝ茶を二三種味はつて、やゝ品の下る茶になつたので、先刻の「鐵羅漢」の味を忘れたくないので、私は小さな茶碗にあとの茶を注いだまゝ飲まずにゐると、奥の茶の庫のはうで働いてゐる苦力のやうな眞黒な半裸體の先生がつかつかとやつて来て、だまつていきなり手をのばして私の残した小さな茶碗を取つて、先生うれしさうにこのよき茶を久し振りに愉しんでゐる。

この「鐵觀音」だの「鐵羅漢」だのといふ名の茶は、見たところでは細い眞黒な小

蟲の干からびたやうなので、その名も、古鐵で出來た佛像のやうなところから出たのだらう。厦門の茶莊のびか一の「鐵羅漢」はその名を彫り附けて綠青の色ざしをしてある立派な然し茶釜ぐらゐの大きさしかない壺に納まつて、茶棚の一番いゝところにお茶の神様の陸羽の像と並んで鎮座してゐる。福建省の漳州附近から出るので現在その邊はまだ敵地のとこだから、奥地の窮乏に堪まりかねて、様々の手段をして海を渡つてこの厦門へ逃げ出して來る避難民のうちのあるものが、眞黒なけちな蟲の干物のやうで、目立たなくてわかる人にはわかつて一斤が十六七元にもなるこのお茶を少々づゝ身に忍ばせて持つて來るのださうだ。

話かはつて滑稽なのは上海の日本料亭の日本の魚介のあるもの、殊に鯛のおさしみなんぞである。

今日は何々丸が入りましたので、このお刺身も長崎のですと云つて眼玉の飛び出るほど高價い。成程日本の魚の味のもちやんとあつて鯛茶漬もうまい。然しまた少しうまくないのもあるし、時には久しく船の具合のわるいと稱する時などは二流の店だと

少しふんと来るあとでクレオソート丸一粒必飲の魚介料理となる。

ところでさういふことは甚だ賢い支那人漁夫と魚屋さんは、ちやんと何とか丸が長崎から上海入港の日に、お手近の舟山列島附近のうす濁りの海から採る鯛その他のしるものを市場へ出す。二流料理屋も高價い長崎仕込のかはりに安い支那海の長崎のお刺身でもうける。

さて北支方面は貧乏に加へて羅麻教、清真(回)教、いろいろ入りみだれてゐるので佛事はひどく衰へてゐるが、中支、南支は人民の懐ろもよし、禪の名僧がいつの時代も多かつたので、現存の立派なお寺は私が見たのは殆ど禪寺ばかりであつた。従つて精進料理は今にちこちに相當ある。お寺の榮えてゐる杭州西湖のあたりや、上海などにも淨菜館で流行る店があつて、中に入ると別に普通の支那料理屋とかはりはないが、觀世音の掛物がかゝつて香が燻つてゐたり、いくらか詩文のいゝのなぞが壁に貼つてあつたりして心もち清潔だ。然し料理は旅人の私が味はつたのでは現在は昔より淨菜料理もすつと下落してゐるのであらうと思ふ。上等を注文するとかへつてジャ

ガ芋の頭にそうめん束ねた尻尾のにせ物鯉が出たりする。かへつて日本に傳はつてゐるあの普茶料理のやうなうまいしびい精進料理も、味のいゝ隱元豆みみたいなものもひとつも出ない。清時代や太平天國の騒ぎあたりにみんなめちやくちやになつて料理法も下落こそすれ、さらに發達しなかつたものにちがひない。

例の金山寺味噌と布袋で名高い金山寺——本名江天禪寺は南京から一時間ばかり汽車で揚子江の下流の鎮江といふ町の丘の上にある。むかしはこれが揚子江の中の島で、あなたの河向ふは例の蕪村の名句「揚州の津も見えそめて雲の峰」の揚州の古都があるところ、お寺は今も流行ると見えて規模も大きく立派だが何から何まで清以後で新しい。名代のお味噌のことはつい坊さんに聞くのを忘れたが、このお寺の丘の下あたりの江の中に有名な「北れいの水」とよぶお茶にうまい水が湧くのださうで、茶の通は上海あたりからこの名水を汲ませに寄こすといふ。話によると桶を揚子江の河中の深いところまでさし入れて水をくんで、上の濁つた揚子江の河水を少しも混ぜないやうにするといふのだから何と難かしい支那式な水取り法ではあることだ。

金山寺の少し下流の河の中に、もひとつ蕉山の定慧寺といふ名刹がある、この今のはなれ島の方が宋時代ぐらゐまでの文献では江の北岸にありとなつてゐるのだが、この方は孤島のおかげで古風のまゝ良く残つてゐて、日本の禪寺と對照して同じところが多い。古雅の建築で學僧も三百人ぐらゐ集つてゐて、頭の頂へんへ四つづゝ三列に十二個の小さなはげのある坊主頭が即ちこゝで修行をした尊き學僧のしるしで、大小老幼の坊主あたまにみんな十二のちいさなはげの行列を持つてゐる。

このお寺は島内その他に寺領が澤山あつて自力自營で苦力なんぞ數十人も飼ひ殺しにしてゐる。名物には「定慧寺の漬物」があるさうだ。さういふことを知らずに、通譯をする人もなく私は大勢でどやどやと見物に出かけたので、この名物を買ひそこなつた。何でもちいさい種々の野菜、赤大根なんぞの入つた愛すべき美味な漬物ださうで今もつて残念におもつてゐる。

南京にはうまい支那料理はあんまりなかつた。蔣介石時代にもいゝ料理といふほどのものは南京になかつたさうで、例の秦准の遊び場所に六華春に太平洋といふ大きい

料亭があるのが現在の南京の主な料理で六華春の方がまだいくらかいゝが、この名ほどにしやれた庖丁ではない。

かへつて漢口の方が、料理の味がふつくらとしてゐる。中支より北京料理の影響がすつと多くなつてゐるところはちやうど、名古屋の料理が上方と東京の半々の味ひとつたのと同じ理窟だ。あるおよばれに料理が中々うまかつたから「好々」だの「素的」だのと給仕に油をかけるといつのか料理人もこのこうれしさうに出て来る。戦後の不便だから大した材料もないが、御自慢の焼き付け玉子なんぞを銀のすかしの爐へアルコールを點じて持ち出した。饅頭がうまいから「素的だ、饅頭多々の要」と片言をいへば「おうおう」と點頭いて新聞紙へまんぢうをうんと包んでくれる。人情はいづこも同じことであつた。

武漢の景 (慰問行)

中型〇〇機はいま實に快よく中支那の大空を、高度千五百米以上で飛んでゐる。その飛行機の中ほどの座席に悠々と腰をおろして私はうつらうつらと半分眠つてゐる。自分の乗つてゐるものが靜止してゐるのでなく動いてゐることは何となく體に感じられるが、それが實にたとへようもなく穩やかでほとんど空中でじつとしてゐるやうな氣持だ。速度は何百キロ米突出してゐるのだらう、その乗り心地のほがらかで、大らかなことは、まるで私がいま天人になつて大きな白雲に乗つて大空を自由に馳けてゐるやうだ。

およそ世の中の乗り物のうちで、空中状態のごくいゝ時の飛行機ほど平かなものは

他にはない。本當にさういふ時は、そよともしない。

あの油を流したといはうよりガラスの上といひたいやうなちりめん波もない南洋のなぎの海の上を大船で行つたととも、ゆれなくても水を動かすエンジンの響がたへす體に傳はつて來る。上等の舗装道路をすべる自動車でもまだどんな最優秀の列車でも、いづれも空氣よりカタイ水の上や土の上へ乗つかつてそれを傳はつて行くのだから體にこたへるものは空中よりきつい。

さて今日は飛んで行く下は、大體揚子江の流れにそふて右岸を大別山脈の山波を越して一直線に漢口盆地へ出るのだ。従がつて氣流も凹凸があつて滿州や蒙古の砂漠の上のような本當に平なものでもないわけだが高度と〇〇自慢の飛行機の優秀さと天候とで、このすばらしい乗り心地をめぐまれてゐる。

同行の輝く部隊の慰問隊のひとびとは今日が初めての飛行機便乗で少々不安な氣もちと愉しさが半々らしかつたが、こんな飛行日和だからすつかり安心して大にはしやいでゐたらしく若い女の聲が鳥が轉々と啼くようにあつちで聞えたりこつちで笑つ

たり、大體我々一行ばかりが乗つてゐる飛行機なので、廣い飛行機をあつちへ行つたりこつちへ行つたり飛びまわつてゐるらしい。

時々うす眼をあけるとその一行の中でも舞踊の彭城秀子さんや藤間勘園さんなどの若い五尺何寸かすらりとよく發達した脚や、白や藍の麻の服や紅い絹のスカーフなどが、灰白色の飛行機のおつちこつちにちらちら半眠の眼の中に幻のようにならつく。副團長格の黒田米子さんまで大いにはしやいでゐるらしくその聲も盛んに私の耳に入る。

昨日までの上海の慰問日程は口きりなのでみんな相當疲れた。段々近づいて來る上海なるものを、よく觀察できず夜の暗くて只もの凄く雜沓する上海のバンドの人波へいきなり呑み込まれて、税關の手つきや出むかいの人たちをその中から探し求める氣苦勞などを初めて味はふのは相當氣づかれがしたであらうに、それからそのまゝ、上海を知つてゐる人ならああ彼所かと想像がつくであらう、新上海ホテルの、部屋が空いてゐなかつたので建物の空地の奥の、ふだんは物置ぐらゐに使つゐるらしい

フラットの廣間の一隅へベッドを並べて、土足の靴も荷物も足の下へしまひ、一隅の板の卓上へ苦力の運んで來た、凹んだアルミの藥罐の水をお茶がはりに飲んで其まゝ寝よといふ、たちまち前線氣分の廠舎みたやうな所へそのまゝ數日間滞在する事になつた。

そしてその凹藥罐のあるテーブルとベッドと荷物をすこし片づけて、その晩は半徹夜で翌日の早朝から出かける慰問の爲めに稽古をやつた。

出發の時、輝く部隊長の時雨女史が特に慰問の曲をはなむけしてくれたのへ漸く作曲が出來ても舞踊の手はまだ半完成だつた。それをこれからすつかりこしらへ上げて、合奏してみたり踊りも合せてみなければならなかつた。船中では初めて船よひ氣味の人もあつて出來なかつた。しかも琵琶と長唄との合奏へ、洋舞と日本の踊りと一しよに踊る、つまり慰問の演藝班一座總出の曲なので、これを何とかうまく調和した一つのものにならなければならないといふ大分難しいものである。

琵琶の鶴田櫻玉さんと長唄の杵屋六知之さんが琵琶と三味線を抱へて寝卷すがたで

ペットの上へ座つて何度も何度も、踊りの地を弾きかへす。

舞踊の二人は長パンツのバジャマ姿へ勘園さんの方は袖が入るのでちりめんの羽織を引つけて舞扇をかざし、洋舞の秀子さんはバジャマに素足で踊りの手を工夫しながら、舞つてゐる。

その日は全く刺戟が多すぎて、みんな疲れ切つてゐた。そこへ頭をつかつて踊りの手を案出するのは苦しいのはわかつてゐる。一番まだ年の少ない秀子さんはもう理屈もへちまもなくなくなつて、早くも途中で投げ出して寝てしまひたいやうな表情になりかゝつてゐる。それを姉さん役の勘園さんがすかしつはげましつ、地方もいやな顔をせずにも何度も弾き返してくれてどうやら、三時ごろになつて慰問曲がでつち上つた。翌早朝はもうまごつかずに兵隊さんの前で、印刷して持つて来た番組どほりに演じる事ができた。

それから毎日、慰問演藝、各隊へのあいさつ、招待、座談會がつゞき、蘇州××隊慰問の日はちようど海軍記念日、でもう中支那はすつかり暑い夏の日になつてしまつ

たから、従がつて疲れは餘計になつてくるわけであつた。

その中一行の中で一人第一班の方に病人さへ出て来た。幸ひに病氣は大した事はな
いさうだが、敏感すぎる藝術家の女性のこと故、過勞から興奮が手傳つてこの儘では
旅行がつゞけにくいやうだ。上海の知人友人達に呉々もその病人を頼んで、先づ入院
でもさせて身神を休養して貰ひ、一行とは又南京で落合ふ事にして、今朝その病人を
なだめつすかしつして私たちは出發したのであつた。然し演藝班の方はみんな元氣で
慰問にはさし支へがない。この輝く部隊の行動も評判がいつのも何より嬉しかつた。

慰問隊の我々は最初から是非漢口まで行きたいと願つた。といふのは内地から来る
慰問團でも漢口まで行くのはその何分の一かに減つてしまふのださうだ。船で武漢へ
往復すればそれだけでまづ十日ばかり費つてしまふので、一ヶ月位の往復豫定の慰問
團はまづ入口の上海から南京附近でお茶を濁し時間のかゝらない都合のいゝところを
なるべく廻つて歸つてしまふのもある。ところで上海あたりは在留日本人は十數萬
るので、若い美しい女性もいつでも見られるし、音樂にも事かゝないし内地の慰

間にはさして餓多もしてゐない。本當に喜び喜ばれる、あの兵隊さんの若い顔がたのしげに輝き、年配のひげ面が相合をくづして無心にわらふのもみんな奥地の慰問で
の情景である。不便なところや、又近くても合の宿のやうに誰でも素通りしてしまふ
やうなところこそ慰問隊が出来るかぎり根よく慰問に廻るべきなのである。

それでも陸軍の慰問團は、奥地各地に多數兵が散在するため、相當の奥地まで出か
けてゆく場合があるが、海軍の方は漢口附近まで上つてゆくのは我々が始めてださう
で、然し日程の方は一日も無爲につかひたくないの、かねて願ひしておいたのがき
ゝ入れられて、飛行機へみんな乗せてやるからといふ誠に有難いことになつたのであ
つた。

上陸以來の半日の休養もなかつた、それだけのあれやこれやの氣疲れと、安心と、
睡眠不足とを一切切この二三時間の飛行中にすつかり清算してしまつて、更にまた
今日の午後からは暑いので天下に名をうたはれる漢口で、大に活躍しようと思つて、
私はのぞきたい眼の下の風物も見るのを止めて、ぐうぐうと寝つゞけてゐるわけだ。

コースは上海から崑山、蘇州を一直線に太湖の眞上をすぎたまでは見てゐたが、そ
れから暫らくはまだ江よりすつと左手を遠く飛んで、大かた安徽省へ入つてから安慶
の手前あたりで右岸にうつゝて大別山脈を越えてゆくらしく、ちよつとうす眼をあい
て下を見ると、初夏にも似合はない茶色をした山山の波がおなじ位の起伏で目の下
ばいに海のやうにひろがつてゐた。

暫くしてこんどは寢不足の眼もはつきりしても一度下をみると、もう大別山脈も越
えて漢口盆地に来てしまつてゐる。下界は右も左も青草の緑があざやかな平野と濕地
とそれから大小の湖沼が澤山ある。

眼がさめるとお腹がすいた。操縦して下さる方にも贈り、我々も機上でもちつたの
しまうとお菓子や果物を、昨夜上海から澤山しこんでおいたのを、探し出して籠の中
へ手をつゝこむと、残つてゐるのは皮ばかり、眠つてゐたのは私ばかりであとの機上
の一同には實に愉しい半日の飛行であつたのだ。

ちいさな市販の地圖ばかり見てゐれば、中支の湖沼は澤山あつても眼につくのは、入口の太湖に中ほどの鄱陽湖に、それから漢口から先きでは洞庭湖の三つときまつてゐる。

もう漢口も見え出して、一同大きはぎでがやがやする頃、漢口よりはるか向ふの方になかなか大きな湖水が見えてくる。せつかちの私があればもしや洞庭湖ではないかと尋ねればそれはまだまだすつと先き、あれは名もない湖沼か、夏の増水期に出来上る池沼のひとつでせうといふ返事だ。洞庭湖とまちがへるはあはて者だが、その大した名もない沼や水たまりが、霞ヶ浦や西浦よりもつと大ききうなのが、いくつもあり大湖水もざらにあるのだ。そして冬の渴水期になるとその有名な大洞庭湖さへもいくすじかの河川になつてしまふといふ。以下の大少の湖沼はおしてしるべしだ。

支那大陸のことは土地ばかりに限らず、萬事さういふ風な伸縮觀念でものを視たり計つてゆかないとも、しんが握めない。

さて長江をしんにして漢口と武昌の二つの市街を跨いで大きく飛行機は一つ旋回し

て地上へ舞ひ下りはじめた。

話に聞いてもいろ／＼と想像してみても如何しても、實際に來て見ると想像には全然及びもつかないほど様子のちがふ風物や地勢の土地もあるものだし又大體想像どほりといふ場所もある。

漢口は此の後者の方で、地圖と繪はがきでみたのと實際とあんまり狂ひのないまづ平凡な市街であつた。古めかしい純支那式でもなく、さりとて新興の都會でもなし、華洋折衷の、天津か上海の中位の繁華な町並を長江の岸壁へびたりと細長くつけたものが即ち漢口の市街である。前後の濕地を埋めたて、新市域や飛行場になつてゐる。新市域は道路の並木もまだ人の背ほどで左右は草原の所が多い。

鼎立する河向ふの武昌も漢陽も漢口よりは繁華でないにちがひないから、河をへだて、その方角でめだつ様なものといへば、武昌の黃鶴樓のある河の曲り角の小丘と、漢陽ではひくい丘陵を背にした有名な製鐵所の熔礦爐の煙突ばかりがこつちの岸

からは眼につくだけだ。

武官府の沖野海軍中佐の配慮で此所の宿舎は大へん上等なのを頂いた。ペランダを持つ廣い清潔な調度のある室にベットが、二つづつで一同は上海に比べて金殿玉樓の心地がする。私もこれなら暑くても皆がいゝ休養をとつて快復できるのが大へん嬉しかった。書き物机でしづかに、まだ電報以外には一つの報告も書かない時雨女史のところへ夜半ゆつくりと通信も書けよう。一行もこういふいゝ宿舎にめぐり合せた時に女のことと髪も洗ふし洗濯もできよう。

午後は早速市内にある海軍病院の慰問に出かける。市中目抜きのところにある大きな建物であつた。

一と通りコース通りのあいさつや講演や演藝が済むと、醫官の方や看護婦長から、廣間へ見物に出て來られなかつた動けない傷病の勇士たちが不足さうな顔をして、子供のように駄々をこねてゐられるから、その病室でちよつとつめ弾でもいゝから、そつとひとくさり弾いて顔をみせてあげてくれといふお話が出た。

元よりはるばる漢口まで來たのはさういふ方々こそ見舞ひたいのだから、早速六知之さんが三味線を抱へてあとの我々も一人のこらすその重症者の室へ出かけた。

そこはみんな寝たきりの勇士たちばかりで、やつれてゐられる血色のうすい顔が、肉親の見舞でも來たやうに悦びに緊張してゐられるを見ると、重傷者のお見舞ははじめてなので一同はつととして先づ胸がつまつてしまつた。

まご／＼すると多感な若い女性たちは鼻をつまらしてゐる位ならいゝが、涙をこぼし兼ねないので、黒田米子さんや私が強いて元氣な笑ひ顔をつくつて先へ立つて皆さんの寢床のへりをそつと見舞つて廻つてあいさつした。それから鶴田櫻玉さんが詩吟をひとくさり、杵屋六知之さんが爪びきで小唄を唄つてひいた。患者の神経につよすぎないようにごく靜かにではあつたが、この二人は心をこめてやつて下さつた。

大きな聲も出せない人々、『ありがとう』とひく／＼云ふのがやつと位のこの人々の感謝の眼を病室中から受けとつた我々は何ともいへない氣持ちになつてしまふ。こゝろいふ情景に初めてあふ人たちにはつよいショックであつたらしい。

弾くにも及ばないから只見舞つてやつてくれればいゝといふ室へ入つてゆくと、普通のベットよりやゝ高い臺が二つ並べてあるきりで、その上へ全身をすつかり繃帯で頭から足の先きまで包んで、二つの眼のあるところと鼻の穴と、口だけをそつと出した傷者が横はつてゐられる。といふよりもむしろ並べてある。

昨日爆撃に出た飛行機の××××で全身に火傷と負傷とを負つて漸く生き残り得た勇士二人であつた。

氣はたしかで居られるが、無論口が利ける所ではない。やつと呼吸を續けてゐるだけで、其の耳も繃帯に包まれてしまつてゐるから、お見舞の言葉を耳へさゝやくすべさへもない。

只、あゝ只その兩の眼は不思議にもすこしの傷もなく今生き生きと——それは本當に此の瀕死の二人の負傷者がもつてゐるようとは思へない程深く澄んで輝やいて、無言でさしのぞく我々の眼にこたへてゐる。すこしも肉體の苦痛やひん死の様子をすこしも表さないで、多分瞬間的なのではあらうか、奇蹟のように今立派に健やかな精神状態

態を表してゐる。

この重傷の勇士たちは果して天佑によつて此の死の一步手前からも一度生還されるか、或はいくばくの間もなく天へ歸つて行かれるのかは、只神々にまかせるより外はないけれど今此の輝いてすみ切つた眼に答へる私たちは、出来るだけの努力をして大きな感激と悲痛の表情とをおしこらへた。そして只々やさしくあらゆる真心をこめた眼で答へてその魂を撫でゝあげなければならぬ。

そして私は無言でこの傷者の體を出来るだけそつと優しく撫でさすつた。眼と眼の外に我々の慰問のこころを傳へるすべとしてこれより外になかつた。

廊下へ出てから漸く私たち一同は涙を存分に流した。

慰問は毎日つゞけられた。

漢口名物の暑氣は我々一行にみやげ話のタネを提供するつもりか例年より早めにとづれて來た。成程噂にたがはず毎日まるで熱帯圏にゐるやうな暑さである。

折柄附近にある我が軍はいま水上に陸上に、大きな作戦行動を開始してゐた。重慶爆撃も毎日出る。漢口はこの陸海空軍の作戦基地であつた。炎熱下の戦闘行軍に比べれば、慰問で流す汗や暑さの事などを何とかかとか云つては申譯けがない。

然し外地の旅になれた私は別として、初めてこんな暑さを経験するたわや、女たちが、日に三回も、あつちへ行つたりこつちへいつたりして和服を着けて熱演をつづけてくれるのは、もしや今日誰かがたはれはせぬか、明日もみんな元気でやれるであらうかと、すい分影では苦勞をする。コロダインの瓶をいつでも私は持つてゐた。ちよつと誰かの眼付きがすこし元氣がないとみると、すぐに飲んで貰つた。

琵琶の鶴田さんはいつも長い曲を一心こめて熱演するので、顔から流れる汗がまた熱風で乾いて、顔の上へ鹽が白く吹き上る。その鹽気で皮膚を荒して今度は顔の皮がみんなむけ出した。杵屋さんの水色ちりめんの出演衣裳は強い光線で忽ちはげて白っぽく焼けてしまった。無論暑いから演奏の時だけしか和服は着ない。

踊る人たちの汗はいふ迄もない。樂屋で次ぎの番組のために衣装を度々着換る時

は、黒田さんと私とが背中の中を汗をふき、團扇であふぐ役になる。黒田さんと私とは講演とは名ばかり、先づあいさつ程度で私は漫談みたやうなユウモア講演をちよつとするだけであとは樂屋番にかはる。踊りのレコードも掛ける役になる。この方は有志の兵隊さんがたいていは手傳つてくれる。

ある時、ある前方の基地まで飛行機で出掛けた時であつた。草つ原に我々を待つてゐた飛行機の中へ入ると私は其儘自分の體が蒸焼肉になるのではないかと思ふほどの熱氣でぼうつとなつて了つた。暑さのたとへ話に雀が電線へ止まつて火傷をして落ちて死ぬといふほどの漢口だ。火傷はうそだが實際は雀も日射病のやうになつて、樹からふらふら地上へ轉げてぼやつとしてゐるのは公園などで時々見掛けるさうである。それほどの漢口の野つ原に炎天下待機してゐた飛行機の内部は實際料理ストオブ位にあつくなつてゐた。

舞ひ降りた基地の小さな舞臺の前には、陸軍も海軍も附近各地から集まれるだけの兵隊さんが千數百名もおしかけて、今か今かと我々を待つてゐた。まだあとからあと

からとトラックに鈴なりになつて兵隊さんは押しかける。たつたあいさつまで入れて六七人の二時間ばかりの演藝を見るのに、真中に陣取つて座つてゐる兵隊さんは、何時間前からか釜の中のやうに蒸されてさぞ暑いことであらう。はしの方はまだいゝとして後れて来た人は何にも見えはしないのも多勢ある。舞臺三分に樂屋七分のぞける場所などはまだいゝ方なのである。見物も見ない先きから大汗で、然も子供のやうにひげつ面が實にあとなくまつてゐる、中にはまち疲れてその中で居ねむりをしてゐる兵隊さんも見える。

こゝにいふ見物は實に素直で大真面目で子供のやうに無邪氣な眼つきで、じつと観てくれる。およそ前線慰問に出たことのある人は皆これを味つてゐるであらうが、どんな慰問出演でも野次を飛ばされたり、ひやかされたりしたのはおそろく一人もあるまいと思ふ。そしてそれが單に將兵ばかりではない、内地で募集されてやつて来た工作隊に居る労働者の人々でさへも、矢つ張り我々に對しておなじやうな態度であつたのは嬉しく氣持ちのいゝ事だつた。

例のあつたかい飛行機で又××へ夕陽を浴びてかへつて來ると、誠に御苦勞だが今夜更にもう一回慰問をやつてくれぬかとお話だ。その隊は現下毎日重慶の爆撃に出るので、晝間は到底演藝などを見てゐる時間はない。夜半も翌朝出動の作業準備で忙しい。たゞ夕食後だけちよつと愉しめる時間があるのであつた。

私たちは無論すぐ承知をした。こゝにいふ隊こそ夜中であらうと何時であらうと喜んでやりませうといふのが我々の意氣である。

急造の舞臺は爆彈の空箱をタテに並べた上へ板を置いた馬鹿に背の高い舞臺で、菰を敷いた樂屋へはその空箱の間から草つ原のマラリヤ蚊がぶんぐとおしよせる。兵食に一杯の麥酒の御ちそうで暑さと疲れとマラリヤ蚊を追拂ひ、元氣をつけて晝間から流しつゞけの汗の上へ汗をかいた、淑女たちは、内地を出た時にくらべればいゝ加減、うす汚れ日に灼けた顔をならべて心一ばいの熱演をした。最後に觀物席から大きな真面目な聲で

『御苦勞様でした!』

と聲がかゝつたら、一日の勞苦は忽ちけし飛んで、こつちこそ『ありがとうございませう』とおじぎがしたいような心もちがした。

慰問出演の間には、又此の地の支那側の智識層婦人たちとの座談會も催される。司令長官からは此度はこつちを慰勞して下さる鄭重な招待がある。文化視察もしたいが忙しいので手わけをして教育の方面は黒田さんに視察して貰つて、私はその間々に、いつか机の上にたまつてゐる扇を描き色紙を描き、勇士から依頼された部隊の記念帖出版のために、寫真とスケッチで口繪をでつち上げて贈らねばならない。其上おもしろい事には去年の南支從軍の間につつてその從軍中ひどくなやまされた兩手の水蟲が、丁度南支那とおなじやうなこの漢口の暑さと、おなじやうな大陸の河水とで私の手のひらで蘇生再發した。水蟲の方はなつかしい故國の汚い水にひたつて再生してさぞうれしからうが、私の方は情けない。夜半ねてもおきても居られなくなるほどこの水蟲の痛がゆいつらさは章熱の地でこれになやまされた人ならさつしがつくに違ひない。

幸ひ此所でも慰問隊の評判がいゝのは嬉しい。我々が來たのを聞き傳へて、めいゝの知人が宿へ尋ねてくる。僅かの手すきの時間には市中見學、散歩、御馳走も味はふ。漢口の料理の味はやつぱり漢口の文化とおなじで、北方の北京と、南京上海とまた四川方面との混りあひで、どちらかといへば北京にちかい風格がある。それだけ新開の南京や上海のそれより風味がある。人間の性格にもそれに似た漢口の特徴を發見できるやうだ。萬事、東京と京阪の影響を受ける名古屋と丁度似た關係になるのであらう。

先日から今もなほさかんに此所を作戰基地にした大きな戦闘が遠くもない所でつゞけられてゐるにも不拘、毎夜漢口の市中の燈火は煌々ときらめいてゐた。中心の繁華街は暑い時期のことではあるし、人出はお祭りのやうに賑やかに、人心もちつとも不安もなくまとまつて居る。テロ事件も一つ二つこの兩三日であつたさうだが、市民の心が大體我が方にすつかりなびいて居るのは、小うるさいわるさの糸を引く、ある種の外國人が此所ではすくなくもあり、上海たりと遠すぎて手も足も出ないセイでもあ

らう。

ある日前線から歸つて來られたばかりらしい、日に灼けた絨衣も汚れた儘の一人の陸軍將校が私をたづねて來られた。

四年ぶりの藤本軍醫少佐であつた。今日戰場から歸つてきて、土地の新聞で私の漢口に來てゐるのを知られてすぐ尋ねてきて下さつたのだ。お互ひになつかしく顔を見合せ乍らも私は心のうちですい分ふけられたなと思つた。事變の始りに應召されてそれから北支中支の戰場で四年をすごした少佐が頭にも顔にも、平和の時の何倍にもあたる勞苦をかさねて、元氣一杯で陽氣なこのひとでもやつぱりその間の勞苦のあとは體ににじみ出してゐる。

それは事變最初の年の暮だつた。天津からあの馬廠滄州の難戰苦戰をして津浦線を南下した兵團が、黄河を初めて渡つて濟南攻略にかゝる直前のことだつた。

鐵道沿線から大きく廣く黄河の下流に散開してゐた大部隊の中に、戰鬪で廢墟にな

つてしまつた部落に屯してゐた部隊でこの藤本少佐に初對面をした。

滿目荒涼、實にわびしい山東の北部の曠野で、粉雪がちらちらするのにな、薪にする樹木さへろくにない所で、部落は入つて一人ゐないまつたくの廢墟であつた。兵隊さんは天津からこの方四ヶ月の間、日本の女はひとりも見なかつたところへ、特別の許可で私がつつた一人大毎特派通信員の腕章をつけて德縣から入つてゆつた。

さういふ所で逢つた將兵といふものはいつまでも特別にお互ひに懐しいものである。その部隊に宿泊を許されて更に下流の方も視察したり部隊に大へん私もお世話になつたのだが、殊に最後の夜は濟南攻略の黄河渡河戦がいよいよ始まつて、この部隊も明日は前進渡河、全軍が動き出したすばらしい時で、部隊長の室で別れの宴をやつた。

この藤本少佐は、壞れた煉瓦より外には本當に何一物ない部落で、どこを如何して手に入れたか鶏を一羽持參して來た。お酒はかね／＼部隊の副官が、この部隊は隊長も大すぎ、部下にもこの藤本軍醫以下、大酒組がそろつてゐたので、本部隊の司令部

へ行つた時に、近頃酒が足りないものでうちの隊長は元気がありませんと報告した。

此の隊長はつよいので有名なので、司令部でも今度の作戦で又ひとつ大にやつて貰はうと、副官のねだるのにまかせてお酒を贈つてよこしたのがまだ相當あつた。

其時の事であつた、その副官と私もせめて今夜の別宴にお魚がほしいと思つて、黄河の禁止區域へそつと魚買ひに出かけて、對岸の敵から射撃され乍らそれでもなまづと川海老を買つてきた。負傷者もなかつたので口をふいてゐたら、誰か酔つてしやべり出して、隊長から眼で笑つて、口で叱られたといふなつかしいおもひもある。

あくる朝雪のちらちらする最後のお別れに一個の日本蜜柑を藤本軍醫や四五人で二房ぐらゐづゝわけて食べあつてみんなが胸をつまらせた。それからは徐州大會戰、揚子江作戰、漢口攻略後もあとの應召將校は大低内地へ歸られたが、藤本さんだけたつたひとり引つゞいて前線の病院長とかはつて残つてゐられたのだ。

話をしてゐるうちに、今やつてゐる作戦で前線から送られて来る負傷者で藤本さんの病院は一ぱいだといふ話、それを聞いて私は我々は今回は海軍の慰問隊であるけれ

ど明日は最後の一日を休養と見物に御暇を下さつたから、その半日の見物をやめてくれる有志をつつてあなたの病院へ慰問出演しませうと申出た。藤本さんは大喜びでかへつてゆかれた。

もともと此の藤本さんは周防岩國の錦帯橋附近の村長さんださうで、中々やり手の村思ひの人と聞いてゐる。嬉しい事には私がたのむとすぐ明日の慰問に全員が参加してくれる事になつた。

粗末なバラックではあるけれど、藤本部隊には演藝場もちやんと出来てゐて、誰が贈つたものか内地製の岩國錦帯橋の圖の木綿の幕まで引かれてあるのもほゞ笑ましい。嬉しさうに我々を觀客の一同に紹介する藤本さんも、特志で出演することち側も大に愉快だ。私のあいさつの中に時々津浦線の藤本軍醫が出てくると、藤本少佐大に首席で、てれてゐられる皆はわつと笑ふ。これから藤本院長の室で一同御晝を御ちそうになると、ああら不思議や揚子江上流六百數十哩のところ特別に鯛のおさしみが並ぶ。どこを如何工面されたのか、廢墟の煉瓦の中から鶏を探し出したり、長江の上

流で鯛が飛び出したり、藤本軍醫の食卓は摩訶不思議だ。

陽氣な藤本さんが上機嫌で接待されるのだから、私以外の始めてのみんなもすつかりいゝ氣持ちでお晝の御馳走に氣がのびのびとしたかはりに折角の漢口武昌見物の時間が半分消えてしまった。

大いそぎで、午後から武昌と武漢大學だけでも見物しようと、長江の渡船の出る時間へあはて、馳け付けた。

空の上から武漢三鎮を大きく大觀するのも中々いゝが、さてまたこうして長江の真中に浮んで左右に漢口、漢陽、また武昌の黃鶴樓はあそこだとながめ廻すのも悪くはない。

漢口での長江の河幅は三分の二哩であるさうだが、初夏のことで増水期ではあるが、此所では漢口も武昌も岸堤が整備してゐるから水の高さこそかはれ、河の幅には三分の二哩變りはない。そのかはり餘つた水が前後左右の湖沼、濕地、池漕にあふれ

て河口から六百二十五哩の奥地でもちやうど日本の利根の河口の潮來出島にでもたへたいやうな水郷が至る所にでき上るといふわけになる。

有名な黃鶴樓の建物はわが明治年間に朽ちてしまつて、同じ場所に安つばい三階の水見の望樓が立つてゐた。長江は突出したこの黃鶴樓の丘の下で曲つて水流は漢口側へ當るようになるので、黃鶴樓下の丘から下流の武昌側は長江の濁流が渦を大きく底ふかく巻いてゐる。あぶないから武昌側へは船は停泊しない。そこで漢口側が榮えて古都の武昌の方はすつと淋しかった。市區改正も立派にしてあり乍らも純支那の町の氣分がつよい。

飛行機からみても武昌側で一番目につくものは武漢大學の建物一つきりであつたが、武昌の市街がぢきにつきて、八重むぐらの茂る野や畑にかはつて自動車で三十分も行くと起伏する丘陵を背景にして、この大學がある。上海の市政府や、廣東の中山大學などと同じ趣の支那型洋風建築の建物が繪畫的に適當に配置されてゐた。南支の中山大學よりも規模もやゝこの方が大きいやうに思へる。

一體支那の都會には郊外まで市民生活が発展してゐるところは殆どない。廣東だけがやゝ郊外まで市民生活がつゞいてゐるが、日本のやうに郊外へ學校が建てば、すぐ商人町が出来る住宅街が出現するのとはちがつて、此の支那隨一の武漢大學も、武昌の町から遠く、附近にも一軒の大學に關した商賈も建たず、ぼつんとひとり建つてゐる。それから内部の學生が多く、研究もいろ／＼盛大になれば嫌でも應でも附屬の建造物もいろ／＼と出来るわけのだが、それも殆どそれと氣がつく程もない。大學の建物は只それだけが外見だけ堂々としてぼつりと建つてゐる。あちこちの北南中支の大學もながめて見たが、私にはどうも支那の事變以前の大學の内容といふものは腑に落ちないしあんまり高く評價が出来ないのだ。

この武漢大學の建物いま××の××に使用されてゐて兵隊さんの手で實にあたりは戦後とも思へず整然としてゐた。

それからつゞく公園風なところを暫らく行くと沼には大きく、湖には小ぶりなといつた多奇はないが愛すべき風趣があつた。西湖とかいつた。

周囲の小山は緑につゞまれて、淵もあり又さゝやかな砂濱の所もあつたりして、これが支那人がよく描く湘南の水景である。水は澄み渡るほどでもなしあまり濁りもせず、湖のさゞ波の上には古めかしい支那畫にある漁舟が四つ手網で何やら漁つてゐるこれで笠をかぶり杖をひいた人物か、驢馬に乗つた男に琴でも抱へた小童が出てくれば、むかしの支那の一幅の掛物がそのまゝ出来る。

然し周囲の丘の木の間には現代式の洋館があつちこつちに程よく建てられてあつた。これはありし日に歐米や支那人の教授達の居宅に使つてゐたださうである。わたくし達は、今は日本茶亭になつてゐるそのひとつの見晴しのいゝポーチでサイダーをのんだりお菓子を食べた平和の日ならゆつくりと本と釣竿でも持つて半日の暑さをしのぎたいと思ふいゝ武漢の休養地である。

然し乍ら、この附近の揚子江が漢時代からすでに二千餘年あれば史上にも現れてゐながら、附近各地には相當散在した名所があるとはいへ武昌にも特に漢口の方にはこれといつて見るべき古いものが割合に少なかつたのは、案外だつた。この旅行の性

質上のつくり調べてもゐられなかつたセイばかりではなささうだ。さういふ事をゆつくり聞いて満足な答へを得るような支那側の人にも、北京や南京のやうには逢へなかつた。

シベリア・北満

モスクワの雪

極寒の頃だった。私は巴里から日本へ歸るのに暖い海を愉しくうまい南洋の果實でも味ひ乍らゆけるコースを取らずにシベリア經由を思ひ立つた。

無論例によつてひとり旅である、我乍ら物好きな話だ、友人は日本人も佛蘭人もこれを聞いて呆れた顔をする。

理由はかうだ、シベリア、ロシアを見るなら本當の味は冬にあらうと思ふし、それに巴里に暮して様々の國の人、國の様子が割合に自由に解つて來ると、する分、露西亞人なるもの良い所も——、多くそれは人の好いお百姓じみた所だが、愚しさもよく解る。それなのに當時の日本では如何いふ気温の加減か赤病が、マンエンして猫も杓

子も赤病クサクないと利口に見えないかのやうに、文弱腦弱の連中が多く患つてゐるのが、内地から送つて来る新聞や雑誌でよく知れて笑止千萬なのだが、兎も角どうも私の腑に落ちない。然し知らずにケナしても無責任だから一度實際此の眼で見えて置かうと思つて、彼の愉しみ多き暖き航海を好奇心の方の犠牲にしたのである。

巴里の波蘭士領事館へ査證を取りに行つては、波蘭士人の貧乏人が巴里に何とうよよ居るかに驚きソ聯の領事館の鎌旗、どうもこれはシネマの漫畫フィルム骸骨を思ひ出していけないのをくぐつて、先頃日本で映寫された『鎧無き騎士』の中に出て来るソ聯の威張れる連中の人相と同じき人物達の人相骨柄を實際に見て、諸君それが然も巴里で優雅な空氣にくらした時の事だから尙更に、やれやれこんな感じの入間の時めく、國を通つて行かなきやならないのかと内心やや憂うつになつた。

當時の露領内の物資の不足といふより皆無なことは巴里まで聞こえてゐたから旅中の食べ物の準備は充分にした。おいしい小さな料理の罐詰などは私自身よりも十幾日間の旅中の同邦人のためにより役に立つた。

コースは波蘭土通過、さてソ波國境へ來ると其の時分も矢つ張りソ波は仲が悪くつて、汽車は國境へおいてけぼりにされて波蘭土國の連中は一人も残らずさつさと行つてしまふ。暫らくするとソ聯の役人其の他が捨子の旅客の接收にやつて來るのが面白かつた。滿洲里でも張學良が喧嘩をソ聯にしかけてソ聯に負けて未だ話がつかない時だつたから、これとやや似た具合で仲々面白かつた。兎も角旅と云ふのは不安と興味とが織り交じつていろいろと面白いものである。

丁度二月の中頃巴里を出發した、シベリアのチタ邊りは零下六十度で汽車が至終遅れるてるさうだ、巴里の新聞に出てゐる。一體日本の新聞はかういふ外國の交通だとか氣温其の他のニュースを出してくれない、ただ人事や政事ばかりなのはよくない。其のくせ近頃は日本人だつて、旅嫌ひのフランス人なんぞより餘程世界中あちこちうろついてゐるのだから、ツウリストの參考になる記事も要ると思ふ、わからないで又だれもかれも無關心では旅人が準備其他にどんなに、暗中モサクをすることか。話はソ

レるがこれからは、せめて東西共榮圈内の之等の事は平和がきたら始終正確に報道してくれることだ。日本ではまた人に聞き合はしても教養の低い人だと誇張したり計數的でなくて、かへつてまごつかされたり、下らぬ無駄をさせられたりする事に、覺えのある人がきつと讀者にもある事と思ふ。

兎も角零下六十度とは如何なるものか、貧弱なる經驗の私には想像がつかない。雪は伯林から降り出して波蘭土へ入ると一面の白布、その白布はすうと地上を敷き續けてロシア、シベリア、滿洲のハルビンも新京——でもまだ白布は切れずに續き、奉天で漸くまだらになつて朝鮮へ入つて初めて土を見た。もう其の時は三月になつてゐたのだが地球といふ大きな圓い果實は冬期は北半球の半分以上も白い粉がふりかかつてゐるのが解つた。

ソ波國境で諸君御承知の例の理窟に合はない馬鹿々々しい換算で露西亞通過に入用なだけの金をルーブル貨にかへた。通用する實質において十分の一にされてしまふのだから苦笑される、そして私は此の時、此所からモスコウ迄の只一夜だけの間を大ふ

ん發で三等列車の切符を買つた、その爲めにわざわざ巴里からソ波國境までしか二等の切符を取らなかつたのだ。

それは、見學のためロシア通過をするにしても、通過旅客はモスコウに滞在を許されるか如何かわからないし、たとへ一二日間、次回の東洋行の汽車まで滞在するとしても到底本當のソ聯の空氣はわかるまい、宣傳のために用意された體裁つくつた面しか見ることば出来ないに違ひないから、たつた一夜だけプロレタリアの本當の味の出る三等列車といふ勇氣を出したのである。

此所には新興プロレタリア國の空氣と昔しながらのゴルキイの『どん底』式な様子とチエホフの小説の田舎百姓達の臭ひの入れまじつた、其夜の三等列車の様子を描寫はしないが、前には私のももぐらいの腕の太さの内儀さんが大肉切庖丁で大きな黒パンをこそげ乍らむしやむしや食べて、胸をあけて乳首を出して赤ん坊に飲ませる、私の頭の上には頼かぶりした田舎娘が泥靴のまゝ登つてゐて、二本ぶらんと私達の眼の前に泥足を下げてゐる、外は大雪、初めて南京蟲に食はれて、かねて巴里から用意し

て来たユウカリ油を取り出して手や首にぬりたくる。

丁度モスコウに共産黨の大會があるので黨員らしいのが澤山乗つてゐた、流石に大會にゆく黨員の中には氣を負つた、しつかりした顔付のものも多い。その一人が女ばかりの此のコムバートへ何處から徴發したのか馬の毛のちくちくする毛布を持つて來て投げ込んで呉れた。

下段の板じきの席の私たちと、今までひとり旅の私が此所で複數に書いたが、驚くべきこのわびしきプロレ車室に、品のいい日本女性を發見して一しよになつたのである。

此の人は日本の某植民地の某大學教授の夫人だつた。夫君は後に思想事件で新聞で檢舉されたのを知つたが、當時歐洲に留學に來てゐたのを、この貞淑な夫人はいろいろと案じられる事があつたのだろう、子供をおいて夫君の傍へ行つてその夫君が今堂々と一等の亞米利加廻りで歸るのにひきかへて、優しい彼女はかぼそい旅なれぬ姿で此のすさまじい三等の極寒の旅で日本へ歸ると聞いた時には相見ざるプロレタリアな

る其の教授に腹が立つた。ああ何と貞淑も消極的なことよ。一たい日本のかぶれやのプロレタリア中には私の經驗によると恐ろしく横暴な性格の人などがかへつて自己の性格やうますぎる境遇に矛盾を感じるのか、柄にもないかぶれプロレタリアになつて、いい傀儡にされて居る例を幾つも知つてゐる。こんなのは幸ひなる哉もともと一時のぼせにすぎないから現今は消滅してしまつた。

私は此のかぼそい貞淑な、只夫思ひの一念のみで此の難コースを言葉も通じずにまだ續けて行かうとする同邦女性を、ひそかに無事を祈り乍ら、二つ持つてゐたアルコオルランプをせめてもと贈つて別れた。

モスコウ驛頭にはかねての電報で東日の馬場秀夫氏が貂の皮の帽子をいただき白い息を吐き乍ら、汚い三等から出て來た私に肝をつぶされた。

當時は外國貨幣をソ聯が五ヶ年計畫でしきりに人用なので、モスコウのホテルは目の玉の出るやうな部屋代を外貨で——私は弗で支拂はされて、其の上滞在税なるもの

を日毎に拂つて二日間滞在した。この具合では百萬長者でも黒ばんと羊の骨を噛り乍らモスコウでは財布の底をはたくだらう。

宿はグラントホテルに次ぐ大ホテルだった、昔は野暮くさくもさぞかし壯麗だったであらう、然しガラスの欠けた所は古新聞で張つてあり食堂はスターリンのお國料理の羊の骨付きのぶつ切りとジャガ芋のごつた汁に黒バンド。粗雑な音を出すラジオだけが一日中ガアガア部屋の中でプロバガンドしつづける。其他ホテル内の萬事の様子は一度軍隊でも浸入して荒したままの家の内部といったら諸君に多少想像がつくでせう。

さて私は寒いので出来るだけうんと下着を出して重ねて出来るだけ野暮くさく身装くつたが、巴里の貧乏畫學生も此所では、男女の黨員らしい宿泊人に白い眼で見られるほど身ギレイに見えるやうである。

市内に自動車は殆ど外交官用以外にはなくなつて雪の中をわびしい電車がガタリコトリと通る、商品窓はみな空屋同様だった。只往來の我等の頭の上には宣傳の文字の

赤い長い布ばかりが目立つて、その下をくぐつて歩く。

市民には韃靼人蒙古人其他のいろんな近東極東の人間が交つて、丁度支那の都の苦力のやうな連中が街頭をのその鼠の木綿綿入れ外套で歩いてゐる。これが大通りで、此の頃初めてロシアからルム、ム、ペンなる新造語が歐洲へも流行つてきた時だった。

モスコウへ来て初めて、此所が東洋と歐洲との半分の邊土だと氣が付く、スターリンとは專政大王様と同義語ぐらゐに此の未開の雜種の人間の半ばは思つてゐるのだらうと思はれるくらゐ、萬事が半分未開で古めかしい。ロシアとは實に矢つ張り歐米の人が『ロシア人を一と皮むけば韃靼人』だの『ロシア人が發明したもののサモワル（藥罐）ばかり』だのと馬鹿にするわけだと思つた。プロレタリア革命が此の民を相手に果して如何せんとするものぞや、百聞一見に然かず、いろいろとロシア見物は私に有意義であつた。

宣傳的の施設の方は何も見物しないで、只昔ながらの『オニエギン』のオペラと金持ちから沒收した佛蘭西近代美術のよきコレクションだけを觀物して、グラントホテ

ルで本場のキャビアやうまい前菜を外交官の特権で某氏に御馳走された。一般の人は食ひ物もろくに得られないらしい様子だった、外交官の食べ物も皆本國から取りよせてゐたやうだ。其の夜は海軍武官少將夫人の好意で武官邸へ泊めて頂いて、あのエライ三等客車の疲れをいやし、翌日、迎への馬場氏と二人でホテルへ戻ると部屋付きの中婆さんが何やらもしやもしやと云つて馬場さんを苦笑させてゐる。

何かと聞いたたら、此の女は昨夜まあ早速宿を開けて何所かへ泊まつて來たと、言ひ付けてゐるのださうだ。何所の國でもこんな事は同じものだと馬場さんと二人、相かへり見て笑つた。

翌る日は、せいぜい三圓ぐらいのフェルトの小さな防寒上靴を卅ルーブルであらうとも、餘儀なくランパツ、いよいよ本場のロシア臭い身仕度で又町の見物をつづけた。

シベリア寒道中

どこの國の停車場でもおなじことで、始發點の大きな驛といふものには必でこれから行くべき方面の空氣がつよく漂つてゐるものだ。それが始めて旅する人の好奇心をなかなかそそるものである。

そしてその方角が特殊な郷土空氣がつよければつよいだけ、初めてその驛へ足を踏み入れたものには印象がつよい。

たとへていへば東京でも上野驛へゆくと一番特色のある郷土的なものが感じられるやうだ。東北辯などが印象的なせいであらう。巴里の數々の驛でも北停車場やサン・ラザアルなどの北方ドイツやアルサス方面行の驛へゆくとより國際的な他の驛々より

もアルサスなまりやドイツづら、波蘭土人のわびしい目付、巴里化や佛蘭西化されな
い人々が匂はせる空気で特色があつたつけが。

さて今、ここでこのヨオロッパも果になつたモスクワの極東行の驛の寒中情景は、
すい分あらゆる國々の驛の人ごみに馴れた私にもさういつた印象の最たるものだ。も
う此所は韃靼國でもあり蒙古でもある――。

滞在三日目の雪も晴間の夕方この極東行列車の發車驛の人混の中へ私は足を踏み入
れた。

上等待合室はないのであらうか、プロレタリアの國のことだから、入れ混りの人ご
みの廣場の中で、見送の馬場さんが何か用達しにゆつたあとを發車までの間は自分の
荷を側に積み上げて、それをのつそりの露人の赤帽と二人で番をしながら私はこの初
めて味はふ半ば韃靼、西域の光景に見とれてゐた。

雲つくやうな古毛皮の大男、頬かぶりの肥つた婆さん、あの四日前の雪の夜の列車
で向ひ側にいたやうな農婦、それがみんな寒中二月のことだから、うんと着こんでゐ

るので、身體の大きいこと、一人づつが大した容量である。みな私の二倍づつもあ
る。滿洲や支那の苦力のやうな木棉の外套も大分まじる。無論お百姓か、又は韃靼人
が木めん外套の着用者で、モスコウの氣のきいた市民や此所では時めく共產黨の連中
はまさかこれは着てゐない。古くとも何とあらうともそれ等の人は歐洲の羅沙外とう
や毛皮の外套である。お百姓の方の毛皮や外套にはぶち犬か何かいともあやしげな毛
皮や毛であるところは、もうすつかり、韃靼蒙古風俗になつてゐる。

何しろ大した人混である。他の市中には極寒のセイかこんなにも市民もルムペンも
集まつてはゐなかつた。これが皆乗車するわけでもないだらうし、又見送り人らしい
のもさうはゐない。暖火があつていくらか暖いので集まつてゐるのかもしれない――
然し何所にも暖まつてゐる場所はなささうだが。

只のそりぶらりとこの寒い中に物めづらしげに集まつてゐるところ、――支那人に
もよくあるが支那はこんな寒くはない。つまりルムペンなる語を世界中に創り出して
ひろめたこのロシアのルムペンの本元諸君は凍らずに、こうして今二月の夕方たくさ